

---

# 雪の上の約束

京(みやこ)

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雪の上の約束

### 【Nコード】

N2696D

### 【作者名】

京みやこ

### 【あらすじ】

高校二年生のリンは辛いことから逃げるように生きている。雪の上で言われた言葉だけが唯一の生きがいだったが、新しい場所で過ごすようになってから人生が変わり始める。友情に支えられながらリンが成長していくお話。

## ブローグ 赤

やっぱり神様なんていないんだ

残酷な赤色で染まった手を見ながらそう思った。

赤いライトが周りを照らしサイレンの音がしばらく鳴っていたと思うけど、私には違う世界で起きていることの様に思えた。

心配して声をかけて来る人も居た気がするけど、あまり覚えていない。

フィルターがかかっているようで、ちゃんと目が見えていなかった気がする。

耳を塞がれていたかのように、ちゃんと音を拾えていなかった気がする。

「気がする」とか曖昧な記憶だけど、でも、確実に起こったことなんだ。

ただ、それだけははっきり覚えている。

それと雪の積もっていたとても寒い日だったといふことも

## 1・高須です。

キンコンカンコンコン……

「起立、礼！」

「ありがとうございました」

目を開けるとともにおなじみの挨拶が部屋に響いた。と、言ってもあまり真面目ではないこの学校で「ありがとうございました」ってちゃんと言うのは先生と、比較的優等生タイプの生徒数人だけだ。ま、私にいたっては起立することもなく終わったことなただけ。

「タカスン、マジウケルし」

「さすがにパネエよ！」

パネエ＝半端ねえ

おなじみの挨拶が終わった後、同じクラスの女の子が二人、笑いながら寄ってきた。二人とも今風の子、という感じで“ギャル”と言えはいいのかな。化粧はバッチリ、髪は茶髪で髪型も朝時間をかけてセットしてきている。スッピンでボサボサの髪で学校に登校してくるぐらいなら遅刻なんかおかまいなし、というタイプだ。多分この二人だけじゃなくて、この学校全体に言える事だろうけど。

とりあえず私は今時の言葉とかよく分からないから、真面目タイプではないということだけ言っておこう。

「………うん？」

「まーだ起きてないな？」

「パネエ！」

起きたばかりの私はもととあまり得意でないタイプの人達との会話にすぐに反応ができなかった。一人はまだ「パネエ」としか発言してないし。

「席についてー！帰りのHR始めるぞ！」

結局返事をしない内に担任の先生（推定四十五歳）が入ってきた。  
「もう帰れるのか。。。」

「パネエ！」

ポツリとつぶやいた一言に、またお決まりの声が返ってきた。席に戻りながら反応するなんて、女の子は何でこんなにお喋り好きなんだろう、とかまだ眠っている頭でボンヤリと思った。

こんな私も女の子としてはどうなんだろう？って思うけどね。

私、高須<sup>たかす</sup>リン。十七歳の高校二年生。

つい二週間前にこの高校に転入してきた。

前の学校とは違う時間割の組み方にまだ慣れていないけど、とりあえず今日も無事に学校生活が終わって良かった。先生がいつもの口調で何か話しているけど、そんなことはお構いなしにさっさと帰る準備を始める。特に長引くような話もなく、帰りの挨拶が終わるとリンは自分の荷物を持って教室のドアへとさっさと向かう。

「ちょっとタカスン、待って待って！」

「今日帰り付き合ってよ。」

ドアへと真っ直ぐに向かっていたリンをさっきの二人が慌てて呼び止めてくる。リンはそんな二人に呼び止められて「何？」と口には出さず表情で反応した。

「タカスン本トに無口だよなー」

「マジパネエし！」

おおっと、まだ「パネエ」ワールドは続くようだ。それにしてもこの二人、話す順番がいつも一緒な気がする。だから片方の子がいつも「パネエ」と言っているのだ。

「今日さ、どうしてもメンバーが足らねえんだよ。」

「お願い、タカスン用事ないなら私らに付き合って？」

一瞬で話の内容がわかり思いつきり嫌な顔になる。授業の合間に合コンのメンバーが足りないとか愚痴をこぼしていたからだ。でもその時はリンを誘わなかった。どうせ首を縦に振るわけではないだろうとか思ったからだろうが、それは正解だ。

「そんなに嫌な顔しないでよ。」

「変なメンバーじゃないからさ！」

と、言っても嫌なものは嫌だ。もともと大勢で集まって騒ぐとかいうのが好きじゃない。相手が変わろうと変じゃなかつと、そんなのは関係なしにだ。

「タカスンいつもさつさと帰るしさあー」

「親睦会もやらず終いだしさあー」

いつも先に話す子がいつの間にか取り出した鏡で髪型をチェックしながら言う。合コン前とあって、休み時間より入念にチェックしている。

それにしても二人そろって語尾を延ばさないで欲しい。何だかこっちのテンポがおかしくなってくる。

「本とは引き立て役呼びたかったんだけどさあ、」

「テンション下がるからやめてな、って先に言われちゃってー」

そうですか。じゃあ私も無理ですね。と言いたかったけど、結局この調子で話す二人にペースを奪われて気がついたら手を引かれて学校の門をくぐっていた。さっきまで教室に居たはずなのにいつの間にかこんな場所まで誘導されていたんだろう。最近の若者は怖い怖い、とかやつぱり言葉には出さずにおばさんくさいことを心の中で思った。

「じゃあ俺らの出会いに乾杯！！」

「イエーイ！」

最初からやたらと高いテンションで始まる挨拶とみんなの声とコップ同士の奏でる音が店内に響いた。

「タカスンもー！」

「イエーイ！」

リンを連れてきた二人は完全に出遅れたリンのグラスにも自分たちのグラスをぶつけてきた。ただ頭数をそろえたかっただけで、店ではほとんど無視されるだろうとは思っていたので少し驚く。しかも絶対にみんなお酒を飲むとか思っていたのに、女の子は全員制服だからとジュースを注文していたのも驚きだ。さっき思ったように「最近の若者は・・・」と見た目だけで判断している人達と同じ考えを持ってしまった自分を少し恥じた。

まあ後から昔お酒を注文したら断られたという話を聞いたりとか、男の人が注文したお酒をもらったりしている様子を見て恥じることはなかったかもしれないと思ったけどね。

合コンには私服の男の人五人と、同じ高校の女の子がリンを入れて五人揃った。男の人は髪の毛が金髪だったりピンクの人がいたり、結構強烈な印象がある。女の子は同じ高校といっても連れてきた二人をのけた後の二人は始めて見た子だった。違うクラスの子だから知らなくてもおかしくはなかっただろうけど、その子達は転入生と言うこともありリンのことを知っていた。

「じゃあまずは・・・自己紹介！」

「イエーイ！」

普通のことを言ってもなぜか盛り上がるこの場所はやっぱり自分に合わない、と乾杯から五分足らずでそう思った。転入してきた時ですら自己紹介が嫌で嫌で仕方なかったのに、こんな高いテンションの中で自己紹介なんかできるわけがない。もう帰りたい、と早々に、やっぱり口には出さずに心の中で思った。

みんなは慣れているかのようにスラスラと自分のことを紹介していく。最近ハマっていることを面白おかしく紹介したり、ブレイク中の芸人のワンフレーズを引用したりして、しょっちゅう笑いがおこっている。その度にやっぱりというか「パネエ」という言葉もよく聞こえた。

そしてこの時初めてこの場所に連れてきた二人のフルネームを知っ



た。

いつも先に話す子が永井佳澄、<sup>ながい かすみ</sup>「パネエ」を連発する子が中瀬彩女。<sup>なか せ あ</sup>最初に話しかけてきた時「私、佳澄。」「私は彩女。彩って呼んで。」という最初からお友達モード全開で苗字なんか聞いたことなかった。知ったところで何か違う関係になるわけじゃないけど、ノリの低いリンにあきもせず話しかけてくれる二人の名前くらいは覚えておかないと失礼かも、と思った。

「じゃあ最後の自己紹介いつてみよう!」

「イエーイ!」

相変わらず盛り上がっている声にハツとすると、自己紹介の順番がいつの間にかリンまで回ってきたらしく、みんなの視線が自分に向いているのがわかった。しかも最後だと言うことでみんなの注目が高まっているのがわかる。

困った・・・。

思わず 止まってしまいその場の空気が張り詰める。

「もしかして緊張しちゃってる?」

乾杯の声を上げた男の人がもう既に酔っ払ってしまってるんじゃないかというハイテンションで話しかけてきた。

「マジで?」

「早くねえ?」

他の男の人や他のクラスの子がありえないし、というような顔で笑っている。

あの、余計に話し始め辛くなってるんですけど・・・・・・。でもそんな中、

「タカスン、ファイト!」

「タカスン、一発!」

小声で応援してくれる二人が居た。もちろんこの場に連れてきた佳澄と彩女だ。

「高須です・・・・・・二年生です。」

ようやく出た声は小さく聞こえなかったのか、みんなりんの方を

見ながら動きがピタツと止まっていた。

「え？」

思わずリンの口から声が出る。それを皮切りにみんなの沈黙が一気に破られた。

「えっ？ 終わり？」

「嘘っ！ 早っ！」

「ってか苗字と学年だけって・・・！」

みんなが大爆笑している。しかしリンには何がそんなに面白いのかわからない。

「えっ？ えっ？」

思わず顔が赤くなっていくのがわかる。

「タカスン、面白れえ！」

「パネエ！ ってか顔真っ赤やし！」

かわいーいとか言いながら佳澄と彩女も笑っている。こんな時どうすればいいんだろう？ とか困惑している内に

「この子は高須リン。最近ウチの高校に転入してきたんだあー」

「タカスンって呼んでね」

と語尾にハートを付けているかのように佳澄と彩女が可愛くフオローしてくれた。

なるほど、自己紹介はそんな感じで言うものなのか・・・と、他の子の自己紹介聞いてた？ と突っ込まれるようなことを今理解した。

相変わらず高いテンションで盛り上がり続けるその場に打ち解けることなく、時間だけが過ぎていく。みんなの話もあり聞かず、「明日は何の授業があったっけえ？」とか「体操服忘れないようにしないとなあ。」とか心ここにあらず、という状態で黙々とご飯を食べていると、突然横から男の人の声がした。

「それ、美味しい？」

「へ？」

突然の声にすつとんきような声が出た。ずっと下を向いて黙り込んだリンは完全にその場で浮いていた。最初の方は佳澄とか彩女とかが話に巻き込む様な形でなじませようとしてくれていたけど、途中でなぜか席替えがあり、トイレに行ったりする内に席順も最初とはぜんぜん違う場所になり、気がついたら端から二番目という中途半端な席になっていた。佳澄と彩女はリンから一番遠い端っこの席で男の人と楽しそうに話していて、リンが会話に加わることは不可能に近い状態だ。

後で知ったけど、合コンの席替えて珍しくないらしいね。

まあそれは置いて、とりあえず話しかけられたビックリした。『ずっと食べてるよね。大根と水菜のサラダ。』

だってみんなが食べないからとか、上にのってるカリカリのちりめんじゃこも美味しいとか、頭の中ではそんな台詞が回ってたんだけど、リンはまた止まってしまっていた。

ビックリしたのは突然の声のせいだけでなく、話しかけてきた人がピンクの頭をしていたから。鎖骨あたりまで延びている髪の色にムラはなく、桜のような綺麗なピンク色の髪の毛。他に金髪の人がいたり紫色の髪をしている人がいたけど、やっぱりピンク色の髪の毛が一番目立っていると思う。だけど目立つのは髪の毛のせいだけじゃない。顔も小さく色白で整っており、体の線も細いからパツと見ただけでは女の人と間違えている人もいるだろう。

リンも最初にパツと見た時は女の人かと思ったくらいだけど、声は意外と低い声だった。そのギャップも加わりリンは箸を口にくわえたまま、ビックリした表情を変えることなく、とりあえず頭を縦に振った。

「美味しいですよ。」

口の中に入っていたじゃこと大根と水菜を飲み込んでからやっと発言した。

「大根、辛くない？」

「全然。」

じゃあ俺も食お、とポソリとつぶやいて自分の皿によそい始めた。「タカスン、こんな時は女の子がお皿にとってあげるもんだよ！」ええと、名前はなんだっけ・・・？ピンク色の髪の毛の男の人は反対側の隣の席に座っている、隣のクラスの子がアドバイスをしてきた。ヒソヒソ話ではなく、普通の声の大きさの声で喋るものだから「この子は気が利かない子ですよ」とさらされているのかもしれないけど。でも、人は見た目では判断しちやいけないと佳澄と彩女で思ったから、アドバイスと捉えておこう。

「いいよ、気にしないで。」

特に気にしている様子もなく、ピンク色の髪の毛の人は言った。自己紹介を注意深く聞いていなかったから名前を覚えていなかったけど、その男の人は皇一（みらいち）といった。

このコウとの出会いで・・・うつん、この合コンに来た事で人生が変わったと思う。

この合コンに来て、コウと出会えて、良かった。

まだ慣れない場所でやっと居場所を見付けることが出来たよ。

もちろんコウだけじゃない、佳澄と彩女にも感謝している。私は自分の気持ちを言うのが苦手だから素直に口に出していえないけど、本当にそう思っているよ。

ありがとう。

## 2・初めての集合

「昨日、大丈夫だった？」

人生初めての合コンに参加した次の日の朝、学校に向かう途中で佳澄と一緒にになった。佳澄は「おはよう」の言葉もなく、リンに突然質問してきた。

「大丈夫って、何が？」

合コンのことに疎いリンは佳澄が何を言いたいのかわからない。

「何って……タカスン、お持ち帰りって言葉知ってる？」

何それ？というものように表情で語るリンに佳澄はハア、と深いため息をつく。

「そうだよ、行ったことないなら知らなくても仕方ナイよね……」

佳澄はブツブツ言いながらうなだれた。

「それにしても、タカスンはマジにパネエなあ。」

おお、今日の最初の「パネエ」は佳澄からだ。佳澄と彩女は二人いつも一緒に居るので佳澄と二人きりになるというのも珍しいけど、佳澄の口から「パネエ」と聞くのも珍しい気がする。もしかして初めてかも？

「あーいうコンパにはちよっぱやなヤツが来る時とか多いからさ、二人で抜けようとか言われたらあぶい時があんだよー。」

ちよっぱや＝早い。ここでは手

が早いという意味で使用。

あぶい＝危ない、危険。

「う、うん……」

前も言っただけ、私は今時の言葉がわからない。だけど、とりあえず良くない人が来ることがあるということだけは伝わった。  
「まさかして……あの人とカレカノになっちゃたりして？」

まさかして＝まさか！

と、もしかしての混合語。

カレカノ「彼氏と彼女

の関係。

「恋人ってこと？それはないよ。」

「なーんだ。ま、無事ならそれでいいか。」

心配の後は面白い展開を期待するようなキラキラした眼で言われただけ、残念ながらご希望に添えることはできない。

「そもそも、地元には彼氏居たりする？」

この二週間、色々と話しかけてきたけど今まで一度もしてこなかった質問を遂にしてきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

リンは思わず黙り込む。

「えっ？」

予想外の反応だったのだろう。佳澄が驚きの声をあげる。

しかしリンの沈黙は彼氏が居ることを表しているのだと、とてもじゃないけどそうは思えなかった。リンの視線は佳澄の方を向くことなく、ただ進行方向である前方を見つめ、表情は固く、暗くなっている。

「・・・・・・・・タカスン？」

佳澄はなにかまずいことを聞いてしまったのだと判断した。

「言いたくなかったら言わなくていいよ？」

リンの表情が少し動いた。横を向くと、隣に佳澄がいない。そう言えば、声は後ろから聞こえてきた気がする。リンは立ち止まって後ろに振り返った。

佳澄はリンよりも先に立ち止まり、数歩離れた場所からリンの方を真っ直ぐに見ている。

「タカスンは真面目だろうから、私たちのことチャラくて適当に生きてるのか思ってるかもだけど、私たちは私なりに、真剣に生きてるんだよ。」

今までの、ずっと笑顔で話しかけてきてくれていた佳澄の面影は

ない。茶髪で、相変わらずのバッチリメイクにセットした髪型だけど、真剣な表情をしている。見た目で判断しちゃいけない、って佳澄と彩女を見てわかっていているつもりだった。でも、それはきっと伝わっておらず、不愉快な思いをさせているのかもしれない。

「あの、私・・・」

「だから、言いたくないなら言いたくないって言っただけ？」

傷つけているのだとわかってリンは何かを言わなくては、という気持ちになったが、その気持ちは佳澄に遮られた。

「勉強は嫌い。恋愛話大好き。そんな私らを白い目で見たりする人もいるけど、でもダチは大事にするよ。」　ダチ＝友達。

瞬きもほとんどせず、佳澄の視線はずっとリンを捕えている。

「それとも私ら、ウザいってずっと思ってる？」

佳澄の顔が少し悲しそうになった。笑ってはいるけど、眼が悲しさを訴えている。

リンは直に首を横に降った。すぐに「良かった」という笑顔に佳澄の表情が変わる。同じくリンも「良かった」と思った。

この時、やっと本当の友達になれた気がした。

『屋上に集合！』

可愛い絵文字でカラフルになったメールを見ながら早速彩女は屋上へと向かう。教室に着いた時、佳澄もリンもまだ来ていなかった。佳澄は遅刻が珍しくなかったし、リンはいつもギリギリに来ていたから、二人はまだ学校に来ていないものだと思っていた。なのに屋上に着くと二人がそろって「おはよう」と声をかけてきた。

「何だ？何の集会だ？」

屋上にはまだ佳澄とリンしかない。授業中の時間には遅刻してきた生徒やサボリの生徒が屋上で時間を過ごすけど、まだ朝のHRが始まる前ということもあり、他の生徒がいない屋上は広く感じられる。

「さっきさあ、タカスンが遅刻したりばつくれたりしたことないって

「いつから屋上に集合してみた。」

ばっ

くれる。さぼる。逃げる。

「マジか！？パネエ優等生じゃん！」

世間一般では当たり前と思われることも、今の時勢（というかこの高校限定？）通用しない。まあ決断していいことではないけど。

「それと、昨日のこと聞き出そうと思って。」

「あ、それは聞きたい。」

聞き出すも何も、別に特別なことはなかったのだけど、「で？」という表情で二人が見てくるから、リンはとりあえず昨日のことを思い出しながら二人に話し出した。

大根と水菜のサラダを食べながら、コウはリンに続けて話しかけてきた。

「転入してきたっ、て紹介されてたけど、どこから来たの？」

「あ、福岡・・・です。」

まだ一杯目のグラスを持ちながら答える。

「こんなところで敬語はなし！みんなシラケちまうぜ。」

そ、そうなんだ。そんなものなんだ。

「もしかして、頭数そろえるために連れてこられた？」

「あ、はい。じゃない！うん、そうです。」

とりあえずシラケさせないようにと努力はしてみるものの、すぐには上手くできない。器用なタイプじゃないのだ。くくくつ、と軽く笑いながらコウは話を続ける。

「実は俺も。」

同じだな、という雰囲気少し緊張がほぐれる。

「多分次はカラオケになると思うけど、もう抜けて帰らない？」

以外だった。カラオケ好きそうな感じがするのに。歌手には髪



毛を染めている人が多いことから生まれた偏見だが、実際にこの合コンのハイテンションについていけている辺りからカラオケとかノリノリに行きそうな感じがしていたからだ。

「明日朝早いんだよ。」

何だ、そういうことか。

「何のバイトやってるんです・・・やっとうと？」

「お、いいねえ。方言。バイトじゃなくて見習い、美容師の。」

コウは方言に反応しながらもちゃんとリンの質問に答えた。何でもよく来店する芸能人が明日来店するらしい。仕事の都合で通常の来店時間に来店することが難しいので来店時間の前に特別時間を設けるらしく、見習いであるコウは来店予定時間よりも早くに店に行き色々と準備をしなければいけない。

そんな訳でみんなが盛り上がった飲食店を出た後、二人で帰るところにした。みんなは疑いの目で見ていたけど、おかまいなしに二人で駅へと向かう。平日だというのに、お酒を飲んで楽しそうな人が多い。それにさすが東京というべきか、人が途切れることがない。

「やっとう開放されたな。」

上手く人をよけながらコウが口を開いた。まだ少し寒いこの季節、口からは白い息が漏れる。

「うん。」

割と明るい声で返事をする。サラダの後、唐揚げをつつきながらコウと話を続ける内にコウとは気軽に話せるようになった。

「東京に来て、やっぱり人の多さにビックリした？」

「うん。電車もあれだけ多いのに、なんで常に人が多いのか不思議。」

「時間にもよるけどね。」

あの通勤ラッシュ時の人の多さは半端じゃない。テレビで観たことはあったけど、思っていたよりずっと大変だ。学校に通うだけであんなに疲れたことは福岡ではまずなかった。

でも、人間というのは時間が経つにつれて、また、経験を重ねる

につれて慣れてくるものだ。ぎゅうぎゅう詰め電車にも同じ方言を喋る人のいない学校にも少しずつ慣れてきている。

「他にビツクリしたことある？」

東京で生まれ育ったコウは外から東京がどう見えるのか興味あるらしい。

「学校に図書室がないこと。」

「それはさすがに東京でも珍しいんじゃない？」

東京で生まれ育ったコウも初めて聞いた様だった。

正確には学校に図書室はあったらしい。しかし、たまり場になるは、本を借りる人はほとんど居ないはで学校側がなくなったらしい。一応注意するがほとんど諦めている先生達の、唯一の反撃かもしれない。しかし、現在倉庫となっている図書室をサボリ場所にしていく人は割と多いと初めて学校に行った日に先生が教えてくれた。

人付き合いが苦手なことから、本を読むことで時間を潰すことが多かったリンにとっては大きな衝撃だった。かといって自分でそんなに多く本を買うタイプでもない。

「都立図書館に行ったりしねえの？」

「・・・どこ？」

二週間経ったとはいえ、まだ住んでいる場所の近くのスーパーとかコンビニとかしか知らない。

「そうか、学校以外で探せばいいのか。」

今、気付いた。学校に通って、本来存在するものが存在しないと諦めるしかないと思っていた。学校以外の世界をあまり知らないから、そんな発想が浮かばなかったのだ。

「本当、お前面白いなあ。」

またくくつ、と笑いながらコウが言う。

「俺の知り合いが勤めてる図書館教えてやるよ。行けそうだったら行って？」

そう言って教えてくれた図書館は住んでいる場所の最寄り駅と、学校の最寄り駅の間にあった。定期があるから交通費から考えると

通うことは十分にできそうだ。しかし、駅から二十分歩かなくてはいけないということから、時間に余裕がないと行けそうにない。けれど、同じ理由からその図書館にはそれほど人が多い訳ではないらしく、人ごみが苦手なリンにとっては好都合だった。

早速明日行ってみよう。

リンはコウと改札口で別れ、ホームで電車を待つ間にそう思った。やっとこの東京で落ち着ける場所が見つかるかもしれない、という希望を感じながら。

### 3・図書館へ行こう

「図書館の場所を教えてもらっただけかぁー」

「まあキモくはないけど、優等生タイプのタカスンには合いそうにないよなぁー」

屋上での集会は一時間程で終わり、解散後である授業と授業の合間の休み時間に佳澄と彩女はトイレに来ていた。もちろんリンは自分に用がないのでこういうのにはわざわざ付き合わない。

「そっいえばさぁー」

洗った手の水を吹き飛ばすかのように手を振りながら佳澄が話を出す。

「ん？」

「タカスンと朝一緒になつて、もしかして地元に彼氏いたりする？  
って聞いたんだよね。」

「うん、うん。」

彩女も恋愛話が大好きで、しかも今まで聞いたことのないリンの話に興味をそそられない訳がない。「早く続きが聞きたい」という台詞が顔に書いてあるかのように表情から見て取れる。

しかし、実際は期待とは正反対の、重苦しい内容だった。

「沈黙。」

「へ？」

佳澄に続き、付き添いで来た彩女もなんとなく手を洗う。

「何かトラウマでもあるんだろぅなぁー」

「じゃあこれからもタカスンとコイバナはできないってこと？」

コイバナ「恋の話」

同じく手を拭く物を持っていない彩女も手を振って水を周りに飛ばしながら、残念そうにつぶやく。

「んー、昨日のことは言ってくれただろ？コイバナではないけど。彩のコイバナも聞いてたし、難しいとこだなぁ。」

実は彩女、昨日来ていた一人といい雰囲気になっているらしい。

集会でリンの話が終わった後、幸せそうにその話をしていた。その時リンはうん、うん、と頷きながらちゃんと聞いてくれて恋愛話が嫌いという様には見えなかった。

「地元の男話だけはしない方がいいってことか。」

「そうなるね。」

トイレの鏡を見て濡れた手で髪の毛をときながら言った彩女の言葉に佳澄が頷く。

気にならないわけじゃないけど、でも言いたくないなら仕方がない。

「先に言ってくれてサンキュ。うっかり聞いてKYになるとこだったよ。あぶい、あぶい。」

KY 空気読めない

「でもさあー、あれ超ウケなかった？」

二人共まだ少し濡れた手のまま廊下へと出る。休み時間の女子トイレは利用者が多く、新しい人がどんどん中へと流れてくる。

「ああ、アレ？」

「どうしてずっと構ってくれるの？」

佳澄がふった話に二人の声がハモった。そして二人で笑い出す。

ハモる

シンクロする、かぶる

「何のメリットもないのに、ってOLかつつの！」

キンコンカーンコン・・・

チャイムの音が鳴り授業が始まるが、一旦火のついた笑いはおさまらない。廊下ですれ違う人が不思議な顔ですれ違っていたけど、そんなのは気にしない。結局教室に入るまでずっと笑ったままだった。

「また明日。」

放課後、佳澄と彩女に挨拶をしてリンは早速コウが教えてくれた図書館へと向かう。

「アイツ何か暗いよね。」

「佳澄も彩も、あんなのと付き合ってたらうつるよ?」

リンがドアを出た直後ぐらいに、未だに名前を覚えていないクラスメイトの声が後ろから聞こえてきた。

「ばーか、今ルンルンで帰ってたじゃねえか。」

「機嫌は超花丸じゃん。」

クラスメイトに続き、佳澄と彩女の二人が言い返してくれる声が聞こえた。リンは喧嘩にならないか少し心配になったけど、直に笑い声へと変わって安心する。

わかってくれる人がいるとこんなにも気持ちが変わる。学校が好きなになれるかもしれない。なれたらいい。自分の居場所があるって幸せなことだと知っているから、そう思う。

ここは東京。生まれ育った福岡とは全然違う。人の数も、電車の数も、日が暮れる時間だって違う。でも、どっちにだって学校はある。福岡で通っていた高校とは雰囲気全然違うけど、でもここで自分を受け入れてくれる人がいる。それだけでいい。

「ダチでいるのに理由なんかあるか。」

「面白れえから居るんだよ。」

ずっと不思議に思っていた。転入生ってことで最初は興味交じりで話しかけてくる人は多かったけど、新しい環境での戸惑いや元々の性格から反応が鈍かったらその内話しかけてくる人は日に日に少なくなった。それなのにこの二人はずっと話し続けてきてくれた。二人だけで盛り上がっている感も否めなかったけど、でも挨拶はもちろん、テレビの話題なんかで話をふってくれたりした。

「何で? 私といたって何のメリットもないのに、どうしてずっと構ってくれるの?」

気がついたら屋上で聞いていた。

佳澄と彩女は一瞬お互いの顔を見て、そしてリンの方を向いて大爆笑した。

「メリットって……！」

「マジウケるし！」

とつくに授業は始まっている時間なのに、授業に出ていないことを全く悪びれる様子もなく、手を叩きながら笑っている。

その日の空は雲が少なく、青く澄んでいて綺麗だった。まだ寒さが残っているけど、ほのかに暖かく感じる日だった。その空をバツクにしながら、少し乱暴にさらりと台詞を言った二人はとてもかっこ良く、まぶしく見えた。

「ここか。」

コウが教えてくれた駅を降り、駅前の多くの店から離れほとんど住宅街となった建物の間を黙々と歩き続けること約二十分。図書館と思われる場所に着いた。「思われる」というのは、『図書館』と書かれた看板もなく、人の出入りも見られないから。でも、どうみても普通の家ではない。

近所のスーパーマーケットよりはるかに小さいけれど、普通の一軒家よりは大きく、外壁は淡い水色。全ての窓にはレースのカーテンがしっかりと閉まっていて、外から中の様子を見ることはできない。入り口のドアは見るからに自動ドアでなく、押したり引いたりするタイプのドア。

パツと見た感じ、知らないと絶対に通り過ぎるタイプの建物だと思う。

キイツ

入り口の前でしばらく立ち止まっていると、ドアが開いて中から

人がでてきた。

「やっぱカンジがつけえ。」

「つけえ」かつこい

「そうか？客を追い出すなんてなんつー店員だよ。」

訂正。今出てきたのは人ですか？と思わず目を見張った。

賛否両論の『賛』の声を上げていたのは金髪にバツチリというか、どぎついメイクで元の顔なんかわからないほど黒い顔をして、緑色のミニのワンピースを着た人だった。下着が見えそうなほどのミニのワンピースの上にはゴツゴツしたベルトが光り、足はヒールの高いブーツで決めている。おそらくサロンで焼いたのであろう黒い肌に、黒のマスカラやアイラインなどをしっかりと使っていてとても同じ日本人には見えない。

そして『否』の声を上げていたのはピンクのＴシャツの上に紫のダウンジャケットに黒のショートパンツ、そして『賛』と同じくヒールの高いブーツを履いている人。肌の色は同じくサロンで焼いているのだろう、日本人離れた黒い肌をしている。しかし、何より驚くのは目を中心に顔の半分が黒く塗られている。とても同じ人間とは思えない。

しかも、ほとんど住宅街の、そして図書館であるはずのこの建物から出てくるにはとてもおかしい光景だった。

「かつけえから許す。」

「まあ顔は悪くねえな。」

リンの視線を全く気にする様子もなく、二人は喋り続けながら歩いていく。

さすが東京。初めて見る光景が多い。

「浦田さん、このドア何とかなんないですか？」

歩いていく二人の背中を見ながらボーっとしていたリンは男の人の声で現実を引き戻された。

「うーん、そうだなあ。どうすればいい？完司君。」



建物の奥から白髪混じりの少し背の低い、おっとりとしたおじさんがでてきた。

肝心のドアはというとさっき勢いよく開けられたのか、閉まることなく外の風を建物の中へと運んでいる。

「いや、俺が聞いてるんですけど。」

その男の人はコウの知り合いの人だと直感で分かった。

少し短い長さの髪の毛は茶髪で、耳にはそれほど大きくないピアスをしている。背は平均的で、桜色の髪のコウと比べるとそんなに目立つタイプではない。しかし、切れ長の目にきりっとした顔つきには男らしさを感じる。

「本を読みに来たの？お嬢さん。」

コウの知り合いと思われる人をまじまじと見てみると、おっとりとしたおじさんが話しかけてきた。

「あっ……はい。そうです。」

「どうぞ、中に。」

ニツコリと笑って中へと誘導してくれる。

「あ……はい。」

ぎこちなく返事をしながら、迎えてくれたその建物の中に入る。

「もしかして、コウの知り合い？」

ドアを閉めながら質問された。もう伝わっていたのか。リンはこくん、と首を縦に振った。

「本当に来てくれたんだ、ありがとう。リン、だっけ？名前。」

笑顔でお礼を言われた。まぶしい笑顔だ。それにしても名前まで伝わっていたのか。

「俺は完司。気の済むまで見てってな。」

優しく話しかけてくれる。確かさっき出てきた人の片方は文句を言っていたけど、いい人そうに感じる。

館内に入って中を見回すと、決して多いとは言えないけど、十分な量の本が並んでいる。東京に来てまだ一度も本屋に行っていないリンには懐かしい光景のように思えた。

「はい。」

嬉しい気分が顔に滲み出ているのが自分でもわかる。  
完司も答えるようにまた笑顔になった。

「バンド仲間？」

「そ。」

完司は自販機で買った缶コーヒーをリンに手渡しながら答える。  
久しぶりの本にウキウキしていると、館内からはほとんど人がいなくなり、時間はすっかり夜になっていた。もともと人はそんなに多くかったが、新聞や雑誌をずっと読んでいるご老人がいたり、子どもと一緒に来て次に借りる本と一緒に探す主婦がいたり、決して人が少ない訳ではなかった。

しかし、閉館間際になるとさすがに少なくなる。本を読む場所だという理念から館内での自習を禁止しているため、リンと同世代の人がギリギリまで居座ることもなく、ほとんど住宅街の中にある図書館周辺は暗く、寂しい場所だと言える。

そのことから完司がリンを駅まで送ることになった。最初は断つたのだが、浦田さんというおじさんも「送ってもらいなさい」というものだから結局好意に甘えることになった。

「あ、お金。」

「いいって。」

「でも」

こんな風にさりげなく奢られることに慣れていないから、戸惑わずにはられない。

「社交辞令じゃなくて、本当に来てくれたお礼ってことで。」

つき返せないような、もっともらしい理由を付けられた。

「あ、じゃあ頂きます。」

ペコリと頭を下げながらリンはお礼を言った。

「バンドでは何の担当をしているんですか？」

「ボーカル。コウはドラムだよ。」

「あ、もしかして日本人離れた二人組みはファンの方ですか？」  
館内に入る前にすれ違った二人のことを思い出した。バンドの追っかけをしているのなら、あんな格好をしているのも場違いなあの場所に居たのも頷ける。

「うん、一応。でも日本人離れって・・・浦田さんと同じこと言ってる。」

完司はフツと笑いながら答えてくれた。やっぱりそうだったんだ。「応援してくれるのはありがたいけど、図書館に来てギヤーギヤー騒ぐのはやめて欲しいよな。本も読まなくせに。」

どうやら片方が完司の熱狂的なファンで、入るのはタダだし、という考えで押し寄せてきたらしい。飲み食いするは注意したら黄色い声をあげるはで本当に迷惑だった様子が完司の話し方から分かる。「図書館、好きなんですね。」

アルバイトだから仕方なく、じゃない。本へ、そして本を読むに  
来る場所である図書館への愛を感じる。

「バンドマンなのに、変だろ？」

否定せず、笑いながら言う。

「え、何ですか？」

「何でって・・・仲間とか、他のバンドの奴らに知られたときに言われたぜ。」「今まで色んなアルバイトの話を聞いてきたけど、地味な図書館で働いている奴始めて聞いた」って。自分でもそう思うし。

「

キョトンとした顔をしながら質問してくるリンに完司は少し驚いた。今まで明るいステージ上ではハジケて歌っているのに、普段は暗い図書館で働いているなんて、っていう反応しかされなかったからだ。

「地味だなんて、ひどいですね。図書館は素敵な場所なのに。」

うるさい音もなく、純粹に本が好きな人達が憩いを求めてやってくる。そんな落ち着く場所なのに。

「お、わかってるねえ。」

少しぶーっとしながら図書館をかばうリンに好感が持てる。

「それに、音楽も文学もどっちも同じ芸術なのにな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

思わず完司の歩く足が止まってしまった。

リンはあまり深く考えずにさらり言っただろうけど、でも心に響く一言だった。

どくん

完司の胸が大きく鳴った。

（いやいや、気のせいだ。）

「どうしたんですか？」と振り返るリンを見ながら心の中では否定したが、完司は自分の顔が赤くなっている気がした。

まだ明るい駅前までたどり着いていなくて良かったと思った。

#### 4・芽生えた気持ち

「マジか!？」

お昼休み、みんながご飯を食べている教室の中に彩女の声が響いた。

「そっかあ、でも佳澄意外と成績いいしなあー」

「『意外と』は余計だ。」

言っっちゃ悪いが、リンもビックリした。

何の話かというと、進路の話。もう春も近づいている今、高校二年生の終わりのリン達は自分の将来について具体的に考えなくてはいけない。

「親が金のかからないとこしか無理っていうし。」

進路に合わせて三年のクラスは分けられる。一応二年生である今も大まかに理数系と文系に分かれているが、三年はそれに加えてそれぞれ国立クラスと私立クラスに分けられる。

佳澄の親の言う、金のかからないとこ＝国立・県立の大学を指すのだろう。

「だから国立クラスの希望になる。」

「そっかあー、三年も同クラになれるいいなって思ったのになあー」

同クラ＝同じクラス

「ごめん。」

「いや、謝んな。仕方ねえよな。」

彩女はヘアメイクの専門学校を目指しているため文系の私立クラス希望となる。同じ文系とはいえ、国立希望の佳澄とは違うクラスになることが決定したのだ。仲のいい二人が寂しくないわけがない。二人とも少し暗い表情になった。

「とかしんみりしたのに、成績であぶれたりしてえー」

暗い顔から一転、いじわるな顔で彩女が佳澄をからかう。

「言っな。シャレにならん。」

さつき成績がいいとか言っておきながら真逆のことを言うのは不思議だが、暗い雰囲気が続かなかったことに安堵の息が漏れる。

「タカスンは？やっぱ国立？」

最初からわかっていているかのように彩女が質問してくる。

「うん、一応。」

リンは昼ご飯の菓子パンを食べながら返事をする。今のところ行きたい大学も学部もないけど、将来の選択肢を広げるために国立コースに進む予定だ。

「何か先コーが言ってたらしいよ。この学校始まって以来の快挙があるかもって。」

「へ？」

先コー

「先公。先生のこと。」

佳澄が何やら不吉なことを言う。

「職員室に行ったやつが聞いたって。タカスン、前行ってた学校、超進学校だったんだって？」

「マジ！？あ、でも、っぽいねー」

っぽい「それっぽい」

どこ情報か知らないけど、先生達そんなこと話していたのか。

「『超』がつくかは知らんけど、一応進学校だったかな。でも、バリバリ勉強して入った学校だし、学内の成績は下の方だったから、そんなに期待されても困るっちゃけど。」

「『ちやけど』！？」

「タカスンの方言初めて聞いた気がする！」

思ってもいない反応が起こる。

「あ、『ちやけど』って方言なんだ。知らなかった」

「福岡って方言強いイメージあんのに、タカスンあんま使わないよなあー？」

「ドラマとかですげえのにな。」

やっぱりテレビの影響って大きいんだな、とリンは感じた。

「でもテレビでよく聞くような方言、若い世代はあまり使わないよ

？」

「マジか！？」

二人の声がハモリ、さっきの彩女の時より声が大きく教室に響いた。リンにとつてはそこまで驚かれたことが驚きだ。リンはテレビでよく聞くような強い方言を使う人は若い世代では今まで会ったことがない。実際にはいるかもしれないし、地域によって方言もさまざまなだから断定はできないが。

「方言って懂れるよなー」

「そうなんだ。」

方言のある地域で生まれ育ったリンには理解できない気持ちだった。

結局その昼休みは方言の話で盛り上がり、リンの通っていた高校の話は流れた。それに

少しホッとした自分にリンは気付いていた。

元々皆が思っているほどの方言を使うわけじゃない。でも、方言が抜けてきているのも否定できない。

・・・うつん、自然に抜けてきているんじゃない。きっと意識的に使わないようにしているんだ。

あのことを思い出さないように。

「こんにちは。」

放課後、今日も図書館へと立ち寄った。今日は昨日入り口で出会った二人に会うこともなく、まっすぐに中へと入る。本を返却するカウンターには完司がいた。

「おっす。もう読んだんだ！？」

「はい、一冊だけだったですし。」

挨拶とともに会話が始まる。

「でも昨日帰るの遅かったのに。睡眠時間削って読んだのか？」

「授業中寝てるから平気・・・」

途中でハツとして言葉を止めた。完司がオイオイ、という顔をしている。

「じゃなくて授業と授業の合間にね。」

ヘッと笑いながら言い直すが、誤魔化せるわけもなかった。

「まあいいけど。でも意外だな。」

リンの返却した本をチェックしながら完司はボソツと言った。

「へ？何がですか？」

「授業とか真面目に聞きそうなタイプなのに。」

『真面目』。確かに見た目はそういうタイプかもしれない。髪は染めていないから真つ黒だし、化粧はしていない。スカートも買った時のままの長さで膝が見える程度。同じ高校の、髪を茶髪に染め、バッチリ化粧をして元々長くないスカートをさらに短くしている子達と比べると優等生に見えるだろう。

でも、福岡の制服はセーラー服でスカート丈は膝下だったから、ブレザーのスカートだけでもリンにとっては十分に短いと思ったのだけだ。

「見掛け倒しですよ。」

リンの口から少しトーンの低い声が出た。完司が「えっ？」と顔を上げる。

「お勧めの本何があります？」

完司の反応を無視してリンの視線は他の人から返却された本の方にある。

「あ、これ、最近映画化した。」

さつき戻ってきたばかりの本を完司が差し出す。携帯小説として話題を呼び、最近映画化した作品らしい。

完司から本を受け取りパラパラとめくる。携帯小説が原作ということで文章が横書きで書いてある。最近は珍しくないけれど、



携帯小説を読まないリンにとっては不思議な感じがする。

めくり終わって表紙を閉じると後ろ表紙に書いてあるあらすじが目に入った。

『こんな人に好きになったのは初めて。だけど、彼が突然留学することになり……100万人が泣いた感動のストーリーがついに書籍化!!』

リンの表情がみるみる暗くなっていくのを完司は見逃さなかった。  
「リン……?」

不安になって思わず声をかけるけど、リンの視線が完司の方を向くことはなかった。

「ごめんなさい、こういう純愛ストーリーも横書きで書いてあるのも苦手なんですよ。」

そう言ってリンはカウンターの上に静かに本を置き、完司に背を向けて歩き出した。歩く先には昨日借りた本と同じジャンルである推理小説が並んでいる。リンは何事もなかったかのように読む本を選び始める。

完司は向けられた背中からしばらく眼を離すことができなかった。頭の中にはさっきのリンの暗い表情がずっとこびりついている。

（俺じゃ、力になれないのかな。）

完司は昨日の夜の胸の高鳴りを思い出した。やっぱり気のせいなんかじゃなかった。

（やべえ、俺）

また自分の顔が赤くなっていくのがわかる。

（リンのこと、好きになったかも。）

自分の気持ちに気付くと恥ずかしさがこみ上げてきて全身が熱くなった。

もっと近づきたい。

さっきのような暗い顔をさせる原因から救ってやりたい。

本を返しに来た人が困ったようにカウンターの前に立ち尽くしていたが、完司はどうしてもリンの背中から視線を外すことが出来ずにしばらく気付くことができなかった。

## 5・浦田さんワールド

「ごめん、待った？」

「いえ、今来たところです。」

まるでカッパルのような会話にどくん、と胸がなり「俺は中坊か！」と思わず俺は心の中で自分につっこんだ。

だけど今まで付き合った時は女の子の方から告白してきてくれたので、自分が先に好きになるのは少し変な感覚だ。

さて、何でこんな展開になっているのかというと、話は昨日にさかのぼる。

「若いつていいねえ。」

「！？」

リンの背中をずっと見ていた俺はいきなりの浦田さんの声に驚き、声にならない声を出した。いや、でもそれでよかったかもしれない。静かな館内を乱すことにならなくて良かった。なんて図書館バカな俺。そしてそんな俺を無視してカウンターごしに本を返却するおばさんに挨拶をする浦田さんがひどく落ち着いて見える。

って、今の俺バッチリ見られてた！？

また全身が熱くなる。案の定、バッチリ見ていたみたいで、おばさんとのやり取りを終えた浦田さんは俺の方を向いてニッコリ笑った。

「え、もう帰るのかい？」

リンが「今日は早めに帰ります」と言ってカウンターに居る浦田さんに挨拶をした時、浦田さんは「まだ帰らないで」という反応をした。

「えっと・・・何か都合悪いですか？」

思わず戸惑うリン。

「もう暗いよ。完司君に送らせるから、ちょっと待って。」

「え、とんでもないです。」

リンは昨日送ってもらったことに少し申し訳なさを感じ、今日は早く帰ろうと思っていた。しかし、東京のほうが福岡よりも日が暮れるのが早いことを忘れていたため、気付けば外は暗くなっていた。

「危ないよ。」

「でも……」

昨日は閉館後だったからまだしも、今日は閉館までまだ時間がある。そんなに迷惑をかける訳にはいかない、とリンは躊躇している。

「いいのいいの。いつもはこの時間駅に朝ごはんのパンを買いに行くんだけど、今日は完司君に買ってきてもらうから。」

浦田さん、ナイス……！

本を棚に並べながら聞こえてきた会話に俺は思わずガッツポーズをする。

「やつぱり、悪いですよ。」

「いいよ、遠慮すんな。」

嬉しいのを勘付かれない様、完司はカウンターへとさりげなく近付く。

「じゃあ完司君よろしく。あ、それとコレ。」

浦田さんがエプロンのポケットをこそそとあさり、紙切れを取り出した。

「知り合いにもらったんだけど、私は興味ないから完司君と一緒に行っておいで。」

そう言っ取りだされたのはお笑いのチケット二枚。

「次の月曜日、学校終わってから暇かい？」

「今のところ予定はないですけど……」

何のチケットか確認できないまま、リンはただ浦田さんの質問に答える。

「じゃ、よろしく。」

浦田さんは有無を言わずにリンの手にチケットを渡す。その光

景を見ながら俺はビツクリ仰天していた。

浦田さん、あなたお笑い大好きじゃないですか！昼間とか人が少ないときに仕事を全部俺に任せて控え室でしょっちゅうお笑いのDVD観ているじゃないですか！そしてたまに笑い声を館内に響かせて俺が気まずい思いをしたりしているじゃないですか！！

と、心の中で叫ぶだけにしておいた。浦田さん、アンタ最高です。「そうと決まったらいざと言うときの為に連絡先交換しておきなさい。」

アンタ呼ばわりしてすみません！それにしてもすげえ、浦田さん。これからは浦田さんが笑い声を館内に響かせても、怒鳴らずに優しく注意しようと思います。

（浦田さんの笑い声よりも完司の怒鳴り声のほうが気まずい雰囲気漂わせていることに完司は全く気付いていない。）

「あれっ？」

お笑いの会場に辿り着き、座れる場所を探していると見覚えのある桜色が見えた。

「コウ？」

「嘘っ！？」

俺は思わず嫌そうな声を上げてしまった。

「リン！それに完司も……。ハーン、今日用事があるからと俺の誘いを断ったのはこういう理由だったのか。」

コウが少しニヤニヤしながら言う。昨日の夜リンを駅まで送り、自分の家に帰ると、コウから電話があった。今日出かけようと言う誘いだったが、もちろんリンとの約束があるので断った。まさか同じ行き先とは思わなかったし。

「こっちの方が先約だったんだよ！それに浦田さんがどうしてもって言うから……」

言っていないけど、そういうことにしといてくれ。

「わかったわかった。」

コウが笑いをこらえながら言う。

「コウはお笑いがすきなのか？」

いつの間にかコウの隣に座っているリンはコウに話しかけ始めた。  
「ん？嫌いじゃないよ。でも今日来たのは美容院の先輩の知り合いが出るからなんだ。」

「じゃあ、今日はその先輩と来てるのか？」

何か俺と話す時よりリラックスしているように見えるのは気のせいなのか？

「それがいきなり昨日体調崩しちゃってさ。代わりに誘った完司も駄目だったし、他のメンバーと来てるよ。今トイレに行ってるけど。」

「

「え、今日バイト入ってなかったんだ。」

「偶然な。」

今日は月曜日。完司の勤めている図書館とコウの勤めている美容院は定休日だ。だけど、他のメンバーはアルバイトをしていて、決まった定休日がないので突然誘って捕まることが滅多にない。

「おっ、完司じゃん。と……誰？完司の新しい彼女か？」

話をしていると噂のメンバーが現れた。

「違う！図書館の常連さんだよ！」

と言っても先週初めて来たばかりですが。

「高須リンです。」

リンはその噂のメンバーのオレンジ色の頭から視線が離れないまま軽く自己紹介をした。

「どうも、雷<sup>らい</sup>です。ギター担当、宜しく。」

そう言って雷は手を差し出した。リンも特に抵抗することなく握手に応じる。雷は人見知りをしない性格で、相手が緊張していようとすぐに打ち解けることができるタイプだ。俺は二人の握手を見ながら何だかモヤモヤっと少し嫌な気分がした。

「俺も高校生だよ、高二。」

雷がリンの制服姿を見て高校生だと気付く。

「あ、私もです。」

「タメなんだから、敬語なんて使うなって。」

「あ、はい。じゃない、うん。」

「俺らの知り合った時と同じような会話だな。」

リンはコウと雷の三人で盛り上がり始めた。しまった、出遅れた。俺とはそんな会話なかったなんて拗ねてる場合じゃねえ。浦田さんの影響からか、名前を「君」付けで呼ばれて、ずるずると敬語を使われている関係から抜け出すチャンスだ。

「俺にもタメ口でいいから・・・」

全部言い終わる前に明かりが落ち、俺の言葉は黄色い声にかき消された。お笑いのライブが始まってしまったのだ。

何てタイミングの悪い・・・。

ライブはそれなりに楽しかったけど、俺が終始落ち込んでいたのは言っまでもない。

「もうこんな時間だし、飯食いに行こうよ。」

「いいねえ。」

ライブ会場を後にしながら雷の誘いにコウがのる。ライブが終わった夜八時ごろ、確かにお腹は空いている。

「リンは？」

「行こっかな。」

「よし、決まり。」

おい、俺の意見は！？と思ったけど、断るつもりは別にないので黙って付いていく。こういう時は雷のバイト先のうどん屋に行く流れだ。そのうどん屋に着くまでリンはほとんどずっと雷と喋っていた。もちろん俺やコウとも喋ったけど、同じ高校生同士、話も合うのだろう。そんな二人を複雑な気持ちで後ろから見つめていた。

「あれえ？みんなそろってどうしたんだ？」

うどん屋に入ると驚きの声を上げる空色の頭の男が居た。

「何、この偶然は。」

コウも驚きの声を上げる。

「今日も食いに来てくれたのかよ、毎度。」

雷が嬉しそうな顔をしている。

「先輩が奢ってくれるって言うからさ、天ぷらも頼んだぜ。で、その子は誰？」

雷と同じようにリンに反応する。

「高須リンです。完司君の勤め先の常連です。」

おおっ、自己紹介が少し長くなった。しかも俺が言った言葉を足して。

「へえー。浦田さんいいおっちゃんだよなー。」

ユキが自分の横の座席を勧めながら浦田さんの名前を出す。そうとも、浦田さんはいいいおっちゃんだ。

「ですね。」

リンが少し微笑みながら返事をする。

「ユキ、ユキの自己紹介がまだだよ。」

ユキの隣に座ったコウが促す。

「あ、そうか。失礼。幸雄ゆきおです。ユキって呼んで。」

雷がユキの頼んだと思われるうどんと天ぷらを運んできている。

「これでバンドのメンバーが全員揃ったな。」

テーブルにうどんと天ぷらを置きながら雷が言った。

本当だ。しかもこんな偶然で。一体どんな糸で結ばれているんだ、俺らは。

「全員で五人なんですネ。」

リンはほのぼのと言う。

「……えっ？」

四人の反応が一緒だった。

五人！？俺、コウ、雷、ユキの四人なんですけど。

「いや、俺は違うから。」

「！？」



全然視界に入っていなかった場所から声がして驚く。

「あ、この人は俺のバイト先の先輩。」

ユキが説明する。

「リン、ナイスボケ。」

雷がつっこむ。

「本当、面白えやつ。」

コウがくくつと笑う。

どうやらユキの先輩が視界に入っていなかったのは俺だけらしい。

「あ、失礼しました！」

少し顔を赤くして照れているリンがいつもより可愛く見えた。

「いやあ、ビックリした。」

ユキの先輩も笑っている。

それから帰るまでは笑いが全然絶えなかった。

リンも今日はよく笑っている。

この笑顔がずっと続けばいい。

リンの笑顔を見ながら、俺は強くそう思った。

## 6・隣で会話

「え、この図書館に住んでたの？」

お笑いライブを見に行った次の土曜日、休みということからリンは昼ご飯を食べてすぐにいつもの図書館に来ていた。何も変わらない図書館だけど、いつもと違うのはリンがエプロンを着て、完司の隣に立っていることだ。

「うん。高校通ってた時。親と上手くいつてなくてさ。しばらくここに寝泊りさせてもらってたんだ。今はアパート借りて一人暮らししてる。」

土曜日ということでもより人は多い。しかし、休みということでも図書館の中でまったりする人が多く、カウンターでの仕事はそれほど多くない。そのことからリンと完司は小さい声で雑談している。

それを見越してからなのか、浦田さんはちょっと外に出てくる、と言ってリンにエプロンを預けて姿をくらましてしまった。

「浦田さん、どこ行ったんだろうね。」

「悪いな、リン。」

完司はリンとこうしてカウンターにいることに幸せを感じ、少し戸惑っているリンに感づかれないうちに一応謝罪した。それにしても今話がとんだな。

あのお笑いライブ終了後、夜ご飯を食べに行った日からリンが少し打ち解けてくれているように完司は感じていた。その証拠に、一度は遮られた願いだったタメ口で話してくれるようになった。でも相変わらず

「うっん。浦田さんは完司君にとってお父さんみたいな存在？」

『君』呼ばわりのままだけど。ま、いっか。

「みたいっていうか、本物の親父より親父っぽいけどな。」

嘘じゃない。完司は今も親父のことが好きになれず、ずっと連絡

もとつていない状態なのだ。

「そうなの？」

「うん。」

「あ、こんにちは。」

少し気まずそうになったリンは、本を借りにきた小学生が来てホツとしたように見えた。さすがというか、手続きのやりとりを教えたりはしないけど毎日来ているだけのことはある。特に教えることもなく淡々と、間違えることなくカウンターの仕事をこなす。

「・・・・・・・・・・」

小学生が帰ると沈黙になった。リンはさっきとは話題を変えようと思ったものの、新しい話題が浮かばなかった。

「気まずさを感じる必要はないから。」

その様子を察して完司が言う。

「昔は本当に仲悪かったけど、今は普通の話くらいはしようと思えばできるから。」

“しようと思えば”つまり、あまり話したくないと言うことか。

「昔はどう接すればいいのかわからなかったんだ。ずっと親父から逃げてた。高校も行く気にならずにサボってフラフラしたりして。でもそのおかげで浦田さんに出会えたんだけどな。最初は浦田さんのことも受け入れなかったけど、今じゃ感謝してるよ。」

会話の始まりは、なぜここで働いているのかだった。リンもアルバイトを始めようと思って、どういう経由でこの図書館で働くことになったのかを聞いてみたのだ。しかし、アルバイトだと思っていた完司は立派な職員で司書の資格も持っている。完司が言うには「気付いたら浦田さんに促されて取ってた。」らしいけど、完司の想いがないと取れないものだと思う。

「まぶしいなあ。」

「え？」

「私、将来の夢がなくて。」

また話がとんだ気がする。まあ女の子の話ってそんなものだよね、

と完司は心の中で納得する。

「図書館も好きだし司書だって素敵だと思うけど、自分になりたいかって思うと何か違うんだよね。」

特に理由はない。でも、リンは自分がやりたい仕事とは違う気がしていた。

「まあなりたいたい職業もその理由もハッキリしている人はリンぐらいの高校生だとそう多くないと思うけどな。」

資格思考の強くなっている今の世の中、大学のカリキュラムにあるしとりあえず取っておくか、という気持ちで司書の資格を取得している人は少なくない。でもその中で資格を利用している人はどれだけいるのだろう。

リンは完司の言うことももつともだと納得している。進路のことで迷っている人は同じ高校にもたくさんいる。でも、いつも一緒に居る彩女の希望進路が固く決まっているのでどうしても焦りが生じてしまう。彩女がヘアメイクの勉強をしたい理由は「好きだから」。単純に思える理由だが、一番大事な理由だと思う。

「アルバイトすんのはいいんじゃない？きつと新しい世界が見えてくるよ。」

「ここで雇ってあげられたらいいんだけどねえ。」

いつの間に帰ってきたのか、そして背後に回っていたのかわからないが、突然浦田さんが会話に入ってきた。

「でも今日はちゃんとアルバイト代渡すからね。」

「とんでもないです！ほとんどここに突っ立っているだけなんで。」

「若者が遠慮するんじゃないの。」

「でも……」

リンの次の言葉が出てこない。浦田さんの勝ちだ。

「そ、くれるっていうんだから貰いなよ。自分が望んでいなかったとしても、今俺が助かってるのは事実だから。」

嘘じゃない。正直いつ居なくなるか分からない浦田さんにカウンターを任せるよりも、リンにカウンターを任せたほうが安心して本

棚の整理なんかができる。浦田さんの言うとおり、リンをアルバイトとして雇いたいくらいだ。

「だけどここは図書館。学校にある図書館じゃなくて公共の図書館は国立だと都道府県、それ以外だと市区町村によって管理されていて、自営業みたいに「あと一人雇おう」とか勝手にすることができない。

「ここはそんなに利用者が多いわけじゃなくて、経費削減とかで司書として勤務しているのは浦田さんと完司のみ。他にはパートの掃除のおばさんがいるくらいで、休む時には代理の人がどこからともなく派遣されてくる。だけど正直一人くらいはアルバイトを雇って欲しいとは前々から思っていた。」

「仕事は本の貸し借りを行うだけでなく色々ある。毎日ぐちゃぐちゃに並び替えられる棚の本を整理し直し、新しい本の購入も膨大なリストから選ぶ。専門書もどれくらい購入したらいいのか頭を悩ませるし、本の場所を聞かれて案内する間にカウンターに人が並んで不機嫌そうな顔をされることもある。あの雑誌も置いてという利用者をなだめたり世間話に付き合ったり・・・世間の皆さんが思っているよりは意外と忙しい職業なのだ。いつ居なくなるかわからない浦田さんとよく二人で成り立っていると思う。まあいつ居なくなるかわからないことを除いては浦田さんは優れた司書だと思うけど、それはさておき、リンのアルバイト代というのはおそらく浦田さんのポケットマネーから出されるのだろう。仕事をしていないのだからそれくらいは当然だと思う。」

「いいのかなあ。」

「まあだそんなこと言ってる。」

「今日もリンを駅に送りながらリンのぼやきを聞いた。お笑いライブに行った次の日から毎日図書館にくるリンを駅に送るのはほとんど日課となっていた。最近真っ暗になってから帰ることはなくなつたものの、館内に人が少ない時は浦田さんの配慮で駅まで送ることとなっている。帰りには浦田さんに頼まれたパンをちゃんと買っ

て帰るので、リンも遠慮しなくなった。

「だって、結構入ってるよ？」

「自給千円とか普通だろ？」

「高いと思う。」

福岡にいる時に飲食店やコンビニでアルバイトの募集を見たことがあるが、高校生の自給なんて六百八十円とかだ。今日は六時間手伝ったのだが、福岡でアルバイトした時と比べると収入が二千円近く違う。だけど東京で生まれ育った完司にとって、その感覚は理解できないであろう。

「そういえば、完司君っていくつ？」

また話がとぶ。でも完司はもう慣れた。

「今年で成人になりました。」

ということは二十歳。

「へえー。」

納得したようにリンが反応する。

「丁度それくらいに見える？」

「うん、お兄ちゃんお姉ちゃんと一緒。それくらいかな、と思ってたから。」

「兄と姉がいんのか。……ん？双子？」

“お兄ちゃんお姉ちゃんと一緒”ということはそういうことだな。

「うん。」

リンは笑顔で返事する。きっと二人のことが大好きなのだろう。リンと知り合って約半月、初めてリンの口から家族の話題が出る。

「上の二人は大学？福岡に居るのか？」

「うん。二人共実家から通ってるよ。」

初めてコウからリンのことを聞いた時、福岡出身だということも割と最近転入してきたらしいということも聞いていた。でも、聞いていただけだった。

「“実家から”……？」

何か引つかかる違和感があった。

「お前、今一人暮らしなの？」

東京に来たのは親の仕事の都合だとばかり思っていた。大学生である上の二人が福岡にすることもおかしいことではないし、家を買わずに置いているならその家から通うのもおかしくはない。ただ親が東京に來ているのなら福岡の家は今“実家”とは言えないんじゃないか？

ヒュウッ

突然の強い風が二人を通り過ぎていった。リンの髪の毛はうなじが全部隠れるくらいの長さで、結ぶほどの長さはない。その髪の毛がリンの顔を覆い、表情が見えなくなった。

風が止んだ頃、リンの髪の毛は少し乱れていたけど表情は充分に見て取れた。

笑ってはいたけど、悲しそうな笑顔をしていた。

初めて見るリンの表情に、完司は金縛りにあったように何の反応もすることが出来なかった。

## 7・ライブへ行こう

「ライブ!？」

春の面影を感じるようになってきた頃、朝の教室で佳澄と彩女の声が教室に響いた。その理由はリンが佳澄と彩女をライブに誘ったからだ。リンから誘われるどころか“ライブ”という言葉が出てくるとは思ってもいなかった二人は思わず絶叫してしまった。

「チケット貰ったんだけど、行ったことないし三枚くれたから一緒に来て欲しいなって思っで……」

兄弟のことを初めて完司に話した日からもう何日も経っていた。

世の中が盛り上がるバレンタインの日、折角なので完司と浦田さんにいつも通り図書館に行った日に手作りのチョコクッキーをプレゼントした。佳澄と彩女にも好評だったチョコクッキーを受け取った浦田さんからはまたお笑いチケットが、そして完司からは自分が出るライブのチケットを渡された。

あの日から完司は少し気まずそうに話しかけてきていた。家族のことをあれ以上聞いてくることはなく、またその話題に触れないように気をつけているのがよく分かった。

「NEX!？知ってるし！」  
ネックス

彩女がチケットを見ながら驚く。彩女の元彼がバンドマンだったらしく、同じステージに立つ事があった完司のグループを知っていたのだ。佳澄は彩女に付き添いライブハウスに行ったこととはあるものの、NEXを見た事はなかったので彩女のような反応はない。

「コウくんもあのバンドにいたのかぁー」

「でもそれっぽいよなー」

合コンで少しは喋ったらしく、二人共コウのことを覚えているようだ。

ドラム担当で前に出てくることも出来ないの、記憶に残らない



のは仕方ない気もする。コウの桜色の髪の毛、街中に出れば目立つかもしれないが、色とりどりの髪の色が密集するバンドマンの中ではそう目立ちはないだろう。

「NEXTって結構人気だぜ？」

ライブハウスに出るようになってまだ一年も経たないらしいが、単独ライブの話を持ちかけられるなど人気は結構あるようだ。図書館にまで追っかけが来ていたぐらいだから、納得はできる。

「ライブとか彩に付き合って行つてた以来だから、いつぶりだ？」

「夏休みに行つたよな？」

その日はオールで遊んで、と楽しそうに二人が思い出に浸りだす。  
「で、ライブの話ね。行く行く。」

少し二人で盛り上がった後、ようやく本題に戻り彩女がリンに返事をする。

「でもさあー、タカスンってどんな服着んの？」

「うつ・・・」

佳澄の質問に思わず声が詰まる。そう、リンは服装のことが一番気がかりだったのだ。佳澄や彩女は学校同様、私服もミニスカートが多く、夏は上キヤミソール一枚が当たりらしいがリンはとてもじゃないけどそんな服装できない。

「まあタカスンは清纯派だからライブに行くような服持ってねえだろ？」

言葉に出すまでもなく、見抜いている彩女の言葉にリンは黙って頷く。

「よし、じゃあライブの前に彩の家集合な！」

楽しそうに彩女が決める。自分だけでなく、人のヘアメイクを考えるのも好きなようだ。佳澄も楽しそうに「おうっ」と返事をする。少し緊張混じりでリンも返事をした。

決戦の金曜日、学年最後のテストのことをほのめかし始めた授業も終わり三人で彩女の家集合した。彩女は家に着くやすぐにリン

に服を手渡した。どうやら昨日までに考えていたようだ。

「超似合ってるし！」

「み、短くない？」

リンに着せられたのは膝上15センチのグレーのワンピースインナーの上に膝上20センチの赤色のロングニットの重ね着だった。ワンピースではないのに、ワンピースのように着るニットはロングとは言え確かに短い。

「真冬だったらカラタイだけど、冬も終わりになってきてるからニースックスだな。」

力

ラタイ「カラタイツ

お洒落には気合が必要、と言わんばかりの組み合わせに正直リンは戸惑っているが、折角選んでくれた服装を拒むわけにもいかない結局リンは彩女から渡された膝上まである黒色のオーバーニースックスを素直に穿く。

「いつも落ち着いてるタカスンが珍しくきよどってるな。」

落ち着きのないリンをみて佳澄が茶化す。

きよどる

「挙動不審状態になる

「だ、だって。」

こんなに足を出したことがないので落ち着ける筈がない。

茶化してきた佳澄はヒョウ柄のキャミソールの上に肩が開いたやつぱり丈の短い黒色のワンピース、そして紫色のオーバーニースックスを穿いている。

「彩、コテ貸して。」

「いいよ。」

落ち着かないリンをよそに露出に抵抗のない佳澄は髪の毛のセツトへと取り掛かる。慣れた手つきで髪の毛を巻き、崩れないように仕上げるスプレーを振りかけている。その傍らで

「ぬ〜」

リンが変な声を上げる。今まで化粧したことのないリンはファン

デーシヨンの下地を塗られるだけで変な感覚がしていた。

「ひ、皮膚呼吸が・・・」

「マジ初めて!？」

「今ドキ珍しいべ？」

次はリンの顔にファンデーシヨンを塗る彩女に、すでに化粧をしている顔に手を加えている佳澄が続く。

いや、福岡で通っている高校では見かけなかったんですけど。休みの日とかは知らないが、前言ったようにとりあえず進学校だったのであまり見た目が派手な人はいなかったと思う。

「じゃあ今日は新しいタカスのデビューの日だな。」

意気揚々とリンを変身させる彩女は輝いて見えた。数年後にはプロ口として、同じように誰かを変身させていくのだらう。彩女の将来のことをふと思うと、リンはまた自分の将来に少し不安を感じずにはいらなかった。

やっぱり来るの間違ったかも・・・。

ライブハウスに来て一組目のグループが演奏を始めた瞬間にリンはそう感じた。

リンの手入れを終えた後、さつさと自分の準備を追えた彩女と、時間を持て余していた佳澄の二人と一緒に始めてのライブハウスに訪れた。それほど広くないライブハウスに、同じような格好をした女の人やそれに見合うような格好の男の人がたくさんいる。人混みが苦手でも、佳澄と彩女と話をしたりして気を紛らわすことによつて何とか持ちこたえることが出来ていた。しかし、演奏が始まるとそうはいかない。演奏が始まると共に盛り上がる佳澄と彩女、そしてその他の観客。以前の合コンの時のようにリンは完全に出遅れていた。

狭い部屋の壁に跳ね返されることでより一層響く楽器の音、正直何と歌っているのか分からない歌声、そしてついていけない周りの盛り上がり思わず倒れそうになる。

そんな時腕をぐいっと引つ張られ、一瞬本気で倒れているのかと思っただ。

「リン、ちょっとこっちこい。」

全部聞き取ることができなかったが、かろうじて聞き取れた声からとりあえず完司だろうということはわかった。そのまま歩き出す完司につられて付いて行くと、完全にステージに目が向かっていた筈の佳澄と彩女も気付いて後から付いてきた。

薄暗い廊下を通り、通された明るい場所は控え室だった。

「一瞬誰か分からなかった。」

そう笑いながら話しかけてくる完司も一瞬誰だかわからない。

「お互い様だよ。」

そつだよな、と周りからも声が漏れる。顔を上げると、いつもとは違う皆がいた。

黒が基調となっているものの、光るアクセサリー類を身に着け、見るからに“ ロック！ ”という格好に加えセットした髪型、そして化粧をされた顔はほぼ毎日会っていても思わず見違えるほどだった。「化粧うめえ！それにセットも！」

リンの後をついてきた彩女が思わず大声を上げると、近くにいたグループからキツと睨まれた。

「集中している途中だから、あまり大声出さないようにね。」

睨んできたグループは出番が迫ってきているのか、ピリピリしたムードを漂わせていた。その人たちを刺激しないように優しく説明してくれたユキに対してリン達三人は「はあい。」と小さく返事をした。

「化粧やセットは自分らでしたんすか？」

どうしても気になるようで彩女は質問する。

「一応はね。足りないところは俺がフォローしてる。」

「そっか、美容師ですもんね。」

コウが軽く説明すると、合コンでの紹介を思い出して彩女が敬語で相槌を打つ。

「ライブハウスだと黒髪目立つな。少しふらつき始めてビツクリしたぞ。」

どうやら完司はチケットを渡した手前、来ているか気になりハウス内を除いたところみるみる元気がなくなるリンに気付き控え室へと連れ出したようだった。

「ありがと。」

感謝の気持ちを述べると、化粧をしているのにも関わらず完司の頬が少し赤くなったのがわかった。そんな何気ない会話をしながら少し時間を過ごした後、とうとうNEXの出番が近づき雰囲気グシッと変わり始めた。

「横で見えていけよ。今回だけ特別な。」

ステージに向かいながらリンのことを心配して完司がそう促す。他に反対するメンバーは誰もいなかった。

優しい言葉に優しい人達。幸せな筈なのに、リンは少し怖くなった。

ステージの脇から演奏を始めた完司たちを見て思わず泣きそうになっていた。

「マジ感動しました!」

「やっぱりすげかったです!」

出番が終わった完司達と控え室に戻りながら興奮を抑えられない佳澄と彩女が半ば叫びながら賞賛する。もちろんリンも同じ気分だった。全員が目立とうとしてまとまりのないまま演奏を終えたグループとは違い、完司達のNEXはバランスの保たれた気持ちのいいグループだった。勿論曲もしっかりしていて、主張しすぎない演奏と完司の綺麗な歌声がマッチしてまるでプロのコンサートに来たような感覚になった。

と言ってもリンはプロのコンサートなどに行ったことはないからあくまでもイメージであるが。ただ、他のグループと比べるととても同じ素人とは思えなかった。

「サンキュ。」

素直に賞賛の言葉を受け止めるメンバーの嬉しそうな顔を、リンは何も言わずただじっと見ていた。

「どうした？」

興奮が収まらないままの一同が控え室に着いたころ、完司がリンに話しかけた。一同の後ろを黙々と歩いているリンの表情が暗く曇っていることに完司はとくに気付いていた。

「元氣ないぞ？」

「あ、ちよつと疲れたみたい。」

「本当に……」

「マジでえー!？」

ぎこちない笑顔で答えるリンの顔を見て完司は何か言いかけたが、その声は佳澄と彩女の絶叫によって遮られた。

「完司、レコード会社の人が来てる。」

すげえ、とまだでかい声を出している佳澄と彩女の傍、いたって冷静なユキがまだ控え室の中に入っていない完司に報告する。

「あ、本当？」

完司もいたって冷静である。しかしさすがにリンはそういかなかった。

「すげえじゃん！」

さっきまでの暗い表情とは一変し、リンの表情がパツと明るくなった。しかも佳澄や彩女の話し方が移っている。思わず完司はプツと笑ってしまった。

「え？何？」

完司が何故笑ったのかわからないリンはキョトンとした顔で完司を見つめた。さっきまでの暗い顔の面影はなくなっていて完司は少し安心する。

「教えない。」

表情がパツと変わって面白く感じたというのもあるけど、今までと違う言い方をした新しいリンを見て嬉しく感じて笑ってしまった

なんて、口が裂けても言えない。

「何？」

「教えない。」

控え室に二人で入りながら行われる他愛のないやり取りにも幸せを感じて完司はまた笑ってしまう。

しかし、続いて欲しかったその幸せは一瞬で終わってしまった。

## 8・新しい名前

ユキが報告してくれたレコード会社の人は二人居た。二人共男の人で、三十路になっっているかなってはいないくらいの、割と若い年齢だった。

「上司が前々から目をつけていてね。今日は代理で来たんだ。」

若干前に立っている男の人が話し始めた。その場に居た皆が思った通り、すげえ話に違いない。思わず笑顔が込み上げてきそうになる中、若干後ろに立っている男の人は話に入ってくる様子もなく、ただじっと立っている。とりあえず仕事上付いてきた、という雰囲気が出しである。

その男の人とリンの眼が合った瞬間、お互い「あつ。」という顔つきになった。

「何で……」

またさっきと一変したリンの表情は驚きと悲しさが混じった、複雑な表情だった。

「音楽関係の方も経営しているんでね。」

リンとは逆にその男の人はさっきまでの退屈そうな顔と一変し、嬉しそうにニヤツと笑った。何かを含んだようなその笑い方は、思わず嫌な気分になる。

その男の人は下を向いてしまったリンの、今までとは違った格好をじろじろ見てまたニヤツと笑う。

「新しい生活を満喫しているようで、何よりだ。」

楽しそうな男の人と違って変わって、リンは苦しそうな表情になっっていく。

「あの？」

「何すか？」

どう見てもおかしくなった雰囲気の中、佳澄と彩女が口を開いた。だが、男の人は二人をチラッと見るだけで、質問には答えずリンの



方につかつかと歩いていった。リンは顔を上げること出来ず、また体を動かすことも出来ずにただそこにじっとしていた。

「新しい友達もできたようで。」

リンの少し手前で立ち止まって、上から見下すように言う。実際に高い身長 of 男の人の顔は、ヒール七センチのブーツを履いて下を向いているリンの頭よりも上にあつた。

「何の力もないお前には、そうするしか出来ないよな。」

リンが両手でぎゅっと服を握った。その手は心なしか震えているように見える。

「それにしても、変わったお友達だな。」

派手な見た目の皆を明らかに馬鹿にしているのがわかった。その場に居る誰もがそのことに気付き、不愉快になった。それはリンも例外ではなかった。ずっと下を向いていたリンがキツと睨みながら顔を上げ、そして右手を振り上げた。

しかしその右手が男の人の頬に当たることは叶わなかった。

「安心しろ、ビジネスに影響はない。」

男の人はリンの右手を軽々と左手で制しながら淡々と言う。ビジネス、つまりNEXとレコード会社との契約のことを指すのだろう。でもその言葉でリンが冷静になれる訳もなかった。

「離してよっ！」

リンが思いつきり腕を振り下ろして男の人の手から逃れた。何か言い返したいのに、言葉が出てこない。

「・・・・・・・・っ・・・・・・・・」

何も言わずにリンは控え室から飛び出した。後ろから皆の呼ぶ声が聞こえてきたけど、リンは構わずに走り出した。

「一体何・・・」

ぽかんとした雷を置いて佳澄と彩女と、そして完司もリンを追って控え室から飛び出した。

「俺達も行くか。」

少し出遅れてコウが、同じく置いてきぼりにされている雷とユキ

を促した。

「お、おう。」

雷はケースに入れたギターを慌てて担ぎ、先に歩き始めたコウの後ろを付いていく。

「あ、あの」

もう一人のレコード会社の男の人が気まずそうに声を出す。

「お宅とは合いそうにないですね。」

いたってまだ冷静なユキが冷静にさりと言いついて残してメンバーを追っていった。控え室にはレコード会社から来た男の二人と、最後に出番を控えた一つのバンドグループだけが残った。

「同意見だ。」

リンを追い詰めた男の人はリン達皆が出て行った後、開きっぱなしのドアを見ながら吐き捨てるように言った。

ずさあつ

「痛っ。」

ライブハウスから飛び出して間もなく、慣れないヒールで全力疾走していたリンは足がもつれて冷たいアスファルトの上に倒れ込んだ。近くを歩いている人たちの視線がいつせいに集まり、その中からはクスクスと笑い声も聞こえたけれども、今のリンにとってはどうでもいいことだった。

「タカスン！大丈夫か！？」

「じろじろ見てんじゃねえよ！」

後から追いかけてきた佳澄がリンの名前を呼び、彩女が周りに向かって叫んだ。リンは黙って上体を起こした。

「リン。」

完司が右手でリンの左腕を持ち、立ち上がらせた。転んだ時の勢いで右手の小指側と、右足の膝上から膝下にかけて血が滲んでいる。「タカスン！」

その怪我に気付き、佳澄と彩女が同時に叫んだ。

「あ、ごめん服が。」

「馬鹿！そんなのいいって！」

服は破れていないもののアスファルト上の砂や小石が全体に付き、右の靴下は破れてもう穿けない姿となっている。借り物なのに、どこか冷静な部分のあるリンに彩女は半ば怒ったように一喝した。

「大丈夫か？」

「わっ！」

追いついたコウに続き、怪我をしたリンを見て雷が驚きの声を上げる。そしてその後ろにはユキがしっかりと追いついてきている。

「雷。」

「おおっ、いいぜ。」

必死に冷静さを保とうとしている完司の言いたいことにすぐに気付き、雷は返事をする。そのやりとりはさすがメンバーというよりも、それを超えてすごいと言える気がした。

そんな二人のやりとりを要約すると、ここから歩いていける雷の家までいき、そこで怪我の治療をしようということであった。雷の家はさつきまでみんなで居たライブハウスから近いとは言いがたいが、歩いて帰れる距離にある。

「歩けるか？」

完司の問いかけに今のリンはただ頷くことしか出来ない。

でも、嘘ではなかった。

不思議と、血が滲んでいる怪我の痛みはほとんど感じないのだ。

完司に握られている左腕の方が何故かずっと痛い。

雷の家に向かう間、完司はリンの手を握ったままだった。怪我をした右手を握るわけにもいかず、リンの左手を完司はしっかりと右手で握っていた。引つ張るような形でリンの二歩程手前を無言で歩いていく完司の背中からは、格好のせいもあると思うが全然知らない人に見える。

そして同じように、リンも無言だった。

「後どれくらい？」

「十分ぐらいかな。」

ふと感じた疑問を口に出した彩女の問いに、雷が答える。大きな声では喋らないが、住宅街に突入した路地の冷え切った空気の中では会話が響く。

完司とリン以外の二人は喋りっぱなしと言うわけでもないが、ずっと無言という状態でもなかった。しかし、一番後ろにいる完司とリンにだけは誰も話しかけることは出来ない。

「あれっ？何あの花束。」

さっきの彩女の問いから五分くらい経った頃だろうか、今度は佳澄が質問をした。すぐ横に公園がある道路の、特に珍しくない場所で生まれた質問だった。その公園の入り口と道路を挟んだ場所にある電柱の元に、置かれたばかりと思われる花束が確かにある。

「ああ、二・三ヶ月前になるかな。そこで事故があつたんだ。」

また雷が答える。その会話は完司とリンにもしつかりと聞こえていた。聞こえていたからこそ気付いてしまった。

ここって

リンはゆっくり歩きながら周りを見回した。広い公園にたった数個しかない電灯はあまり意味を成し遂げておらず、ほとんど真っ暗な状態だった。その前にある割と狭い道路に電柱。右側には住宅が並んでいる。

知っている場所に間違いなかった。

怪我した足でゆっくりと歩き続けていたリンの足が止まってしまった。それにつられてしつかりと手を握っていた完司も立ち止まり後ろを振り返る。でも、名前を呼ぶこともなく相変わらず無言のままだった。

「あの事故って若い男の子が一人意識不明になったよな？花束が置

いてあるっていうことは亡くなったのかな。」

コウが初めて知った、という感じで少し悲しそうに言った。誰だって花束が置いてあればそう思うだろう。場の空気が一瞬重くなり、皆何を言ったらいいのかわからなくなった。

そんな沈黙を破ったのは、ずっと黙り込んでいたリンだった。

「死んでないよ。」

泣き声のような声だった。皆が振り返った視線の先に居たリンの目には実際に涙が浮かんでいる。そんなリンの視線は誰にも向いておらず、例の花束に釘付けとなっている。

「死んでないよ。だって」

その先は言葉にならなかった。堪えきれない涙が次から次へと溢れ、リンの頬を通り過ぎてアスファルトへと落ちていく。

だって何の連絡もないんだもの。

リンは思わず立っていらなくなってその場にしゃがみこんだ。どんなにみつともないと思われても我慢することができなかった。

「新あつ。」

顔が涙と鼻水と、そして落ちた化粧でぐちゃぐちゃになる。でもそんなの気になる訳がなかった。

そんなリンをずっと見つめていた完司の右手から力がみるみる無くなり、リンの左手はとうとう離れてしまった。離れたリンの左手が冷たいアスファルトの上へ落ちていく様子はスローモーションがかかったようにゆっくりと見えた。

リンはしゃがみこんだまま、その場に居た誰もが聞いたことのない名前を何度も呼びながら泣き続けた。誰も話しかけることなど出来やしなかった。

## 9・もう少し

目を覚ますと、まず見たことのない天井が視界に入った。

「暑い。」

知らない部屋にいる驚きよりも、まずそれが最初に湧き出た感情だった。やっぱり知らないベッドの上で佳澄と彩女と思われる女の子二人に挟まれて寝ていたリンは、そつと体を起こした。

「痛い。」

包帯の巻かれた右手に気付くと、擦りむいた箇所が急にヒリヒリと痛くなった気がしたが、それよりも頭の方がずっと痛く、そして重く感じた。

「ああ、そつか。泣いたんだっけ。」

頭痛の原因を考えると、雷の家に向かっている途中で小さい子みにたいにボロボロ泣いたことを思い出した。あんなに泣いたのは、一体どれくらいぶりのことだったであろうか。

女の子二人に挟まれたままボーっとしていると、部屋のドアがコンコン、と二回ノックされて開いた。

「あ、起きてたか。」

セツトされていない髪型に化粧をしていない雷の顔を見ると、昨日のことは夢だったんじゃないかと一瞬思った。

きつと、そう思いたかったのだ。

「あの、隣にいるのは佳澄と彩女でいいんだよね？」

朝の挨拶なんてすつ飛ばしてリンはまずそれを確認した。化粧を落としてスッピンになっていた佳澄と彩女の顔を初めて見たリンは自信を持てなかったのだ。

「お前、さすがにそれは失礼だろ。」

肯定も否定もせず、ただ雷からは飽きたような反応だけが返ってきた。

「んー……タカスン！」

「タカスン!?」

そんな二人のやり取りのおかげで目が覚めた彩女が寝ぼけ眼でリンの姿を確認すると、驚いたように飛び起きた。それに続いて佳澄も飛び起きた。眉のほとんどない顔で二人がリンを凝視する。

「お、おはよう。」

沈黙に耐えれなくなったリンはやつとと言うべきか、とりあえず朝の挨拶をした。

「大丈夫か?」

雷がリンに声を掛ける。怪我のことを指しているのか、昨日の事を指しているのか、それとも両方のことなのかはわからないが、心配してくれていることだけは理解できる。

でも何と返事すればいいかはわからない。リンは思わず黙り込む。「タカスン、まだ私らには話せねえか?」

次の沈黙を破ったのは佳澄だった。以前「言いたくないことは言わなくていい」と言ってくれたその日から一度も核心に触れるような話をしてくることはなかった。そして彩女もそうだった。だけどそれは、興味が無い訳では決してなかった。

そんな二人の思いやりにリンも気付いていた。

「もう少し・・・」

色々な思いが交錯しながら、やつとのことと絞り出した声は小さかったが、部屋に居た三人には聞き取ることがちゃんとできる大きさだった。

「もう少し待つて。」

今すぐには話せない。まだ少し混乱しているからということもあったけど、最初は完司に話さなければ、と思った。

何故かはわからないけど、そう思った。

「はあ。」

日曜日ということで普段よりも利用者が多い図書館の中で本を棚

に並べていた完司は大きく溜め息をついた。

『新』

泣きながらリンが呼び続けた名前と、そのリンの姿が頭から離れてくれない。

「どう考えても好きなヤツだよな・・・」

無意識に声が出ていた。リンがこぼした涙の意味を聞きたいけど、聞くのが怖い。知りたいけど、知りたくない。そんなことをずっと考えている今日の完司は、誰が見ても明らかに全然集中力が無い。

「完司君。腕、どうしたの？」

「わぁっ！」

いつものごとく、背後から突然聞こえてきた浦田さんの声に体が跳ね上がった。

「浦田さん、イキナリ話しかけないで下さいよ。」

「ボーっとしてたから驚くんだよ。」

いつものようにニコニコしながら的を射たことを言う。

「で、腕どうしたの？」

浦田さんは先程の質問を繰り返した。

「ああ、ちよつと筋肉痛で。でも仕事には影響ないですよ。」

そう言いながら棚の上の方に本を置く完司の動きはぎこちない。

昨晚リンはしばらく泣きじゃくった後、少しずつ声が小さくなり最後には静かになった。ピクリとも動かない姿に少し慌てたが、眠ってしまったことがわかると完司はすぐさまリンを持ち上げた。膝で顔を隠すようにしゃがみこんでいたリンをお姫様抱っこで抱え、それまでとは逆に皆の先頭に立って歩き出した。誰も止めることはなく、黙って完司の背中を追っていく。

決して長い距離ではなかったし、リンも軽い方だが、抱えて歩くとなるとさすがに男でも大変だ。腰や足など全身に疲れはきているものの、腕が断トツである。

「今日はずっとカウンターに居なさい。椅子に座っていてもいいから。」



ぎこちないながらも本を並べていた完司をじつと見ながら浦田さんがそう支持した。カウンターではいつも立ちっぱなしで、確かに今日の完司には辛いかもしれない。だから気を紛らわそうと浦田さんにカウンターを任せて本を棚に並べていたのだが。

「いや、駄目っすよ。筋肉痛で仕事を口々にこなせないなんてそんなの。」

「いいから座りなさい。」

バンドのせいで仕事に影響を与えるわけにはいかない。これはバンドを始めた時から自分の中で決めていることだった。座っても仕事はできるが、いつもと違つとそれはやっぱり影響を与えていることになる。

だからせつかくの心遣いも断ろうとしたが、その気持ちは浦田さんによつてあつさり切り捨てられた。

「ね？」

笑顔で言うものの、こういう時の浦田さんは少し怖いものを感じる。リンが前にお笑いライブのチケットを貰つた時のように、断ることができない圧迫感を感じるのだ。

「はい。」

好意を素直に受け取ることにし、返事をする重要なことに気がついた。

「浦田さんがここにいてつてことは今カウンターは・・・」

誰も居る訳がなかった。

「浦田さん！」

浦田さんに軽く怒鳴つた後、全身筋肉痛の体で小走りにその場を離れてカウンターに向かつた。すると案の定、何人か本を借りようとカウンターの前で待機していた。「やっと来た。」という反応をする人達に完司は謝りながら仕事をこなし始めた。

今の完司には忙しくくらいで丁度良かった。

「リンちゃん今日来なかつたね。」

「ぶっ！」

カウンターで一日を終えた閉館後、浦田さんがつぶやいた一言に完司は過剰に反応し飲んでいたコーヒーを口から勢いよく噴出してしまった。

「あーあ、ブルマンなのに。」

そう言いながら浦田さんがティッシュを差し出してくれる。

「リ、リンだつて忙しくて来れない時くらいあるっすよ。」

完司は差し出してくれたティッシュで口元を拭きながら自分に言い聞かせるようにポツリと言った。今日ずっとカウンターの所にいながら結局リンを探していた自分に気付いていたからだ。リンと同じ世代や似た背格好の人が視界の隅に入るとどうしても視線がその方向に向かっていた。浦田さんもそれに気付いていたのだろう。

「体調を崩してないか心配だなあ。完司君、明日は休みだしリンちゃんも元気がどうか確認してね。」

確かに明日は月曜で、図書館の定休日。今のところ何の予定もない。

「あ、ハイ。」

さりげなく連絡を取るように促されたことに気付いた。リンに何か連絡しなければ、と思いつつ何て切り出せばいいのか思い浮かばずに困っていたけど、浦田さんが用件を作ってくれたことで格段に取りやすくなった。さすが浦田さん。

「叶わないな、浦田さんには。」

きつと何かあったことにも気付いているのだろう。だけど追求せずにそつと背中を押してくれる。そんな浦田さんはすごい大人だと思う。もっとも仕事をよくサボるのはいけないと思うが、それでも憎めない雰囲気を持っている浦田さんは完司の憧れだ。

ブルルルルル

浦田さんが差し出してくれたティッシュをゴミ箱に捨てた瞬間に、

机の上に置いてあるバイブ設定の完司の携帯電話が鳴った。

「はい。」

リンかと思い、画面で発信者の確認をすることなく慌てて着信ボタンを押す。だが、電話の向こうから聞こえてきた声はずっと前から聞き慣れている声だった。

「俺。仕事終わった？今大丈夫か？」

「何だ、ユキか。」

つい落胆してしまい、ため息をつきながら気の抜けた声を出した。

「何だとは何だ。失礼なヤツだな。」

もつともな意見である。

「ごめんごめん。で、どうしたんだ？」

とりあえず謝り用件を聞くと、

「今の俺がバイトしてる近くにあるコンビニまで来てもらえるか？」

そう簡潔に言ってプツツと電話が切れた。まだ行くなんて返事していないのに……。

「すみません。今呼び出しくらったんで、もう帰ります。」

完司は浦田さんにそう言いながら帰る準備をせつせと始める。と言つても上着を羽織るくらいだが。

それにしても何の用だろう？なかなか電話がつかないユキから連絡なんて珍しいな。

そんなことを思いながら、寒さの和らいだ夜道に出た。昨晚と同じくらいの気温で、思わずリンの姿がフラッシュバックする。

ふうー

気を取り直すかのように目を閉じて深い息を吐き出すと、真冬のように白い息は生まれず静寂だけが完司を取り巻いた。

「とりあえず、行くか。」

誰に話し掛けるでもなく、目を開け、完司はユキから言われた場所へと歩き出した。

## 10・大丈夫

はあー

すっかり暗くなつてしまつた閉館直前の時間、いつものようにシンプルな格好のリンは図書館の前で深く深呼吸した。昨日の今日、どんな顔で完司に会えばいいのかわからない。でも、逃げたくない。そう思つて雷の家から帰つた後、入浴と食事を済ませると休むことなく図書館へと向かつてきた。当たつて砕ける精神でとりあえず会ふんだ、という気持ちでラジオ体操の時よりも深く深呼吸して気持ちを落ち着けた。

何に当たつて砕けるかはよくわからないけど、それくらいの勢いが今必要なのだ。

よし、入ろう。

決心してドアノブに手をかけようとした瞬間、突然後ろから強い力で引つ張られた。

「!？」

リンは予期せぬ出来事に声が出ず、代わりに心臓は図書館のなかまで聞こえるのではないかというくらいバクバクと早く鳴つた。

「お前、昨日も完司の周りチョロチョロしてたろ？」

「もしかして彼女お？」

さっきまでの進行方向とは逆の向きに振り返ると、声が聞こえると同時に強烈な二人組みが視界に入った。初めて図書館に来た時、入れ違いで帰つていった完司のファンと思われる人と、その友達だ。「へっ？まさか。」

まだ半分動揺したまま、とりあえず変な誤解が生まれない内に事実を伝えたが、最初からリンの意見を聞き入れる様子はない様だっ

た。

「ちよつと来いよ。」

「えっ？あの。」

動揺の残るリンに構うことなくツカツカと歩き出す完司のファン。そして、そのまま引きずられるように歩くリンの後ろを友達が無言で付いてくる。どうみても変な光景だが夜ご飯時、ほぼ住宅街の中にあるこの場所で人とすれ違うこともなく、リン達三人は図書館からどんどん離れていった。

「で？お前何なの？」

リンが連れて行かれた場所は図書館から歩いて十分もかからない工事現場だった。仕事が終わった時間帯で人気もなく、もちろんほとんど真つ暗である。しまった、何でノコノコ付いてきてしまったんだろっ？と思っても時既に遅し。

「黙ってねえで何とか言えよ！」

閑静な場所で怒鳴り声が少し響いたが、前の道路を通り過ぎていく車の騒音にすぐに掻き消された。

「何って・・・」

ただの友達、と言おうとしたけどその言葉はリンを睨みつけている二人への耳へ届くことなく、リンの喉の奥へと呑み込まれた。

友達？年が少し離れているから変かな。友達と言うよりお兄ちゃんって感じがするし。現にお兄ちゃんと同じ年だからそう思うのも無理ないけど、そんな説明で二人が納得する気がしない。

それに、ただの友達じゃない気がする。

「なあ？」ガアンツ　ジャラジャラジャラ・・・

イライラがどんどん募っていく完司ファンが傍に置いてあった工具箱を蹴り飛ばした。中からは多様のサイズの釘が数え切れないほど飛び出し、地面を釘色へと覆いつくした。

「ちよつとちよつと、大事な道具を粗末にしないでくれる？」

結局リンが返事をしないまま困っていると、聞き覚えのある声が完司ファンの向こう側から聞こえてきた。

「ユキ？」

「ユキいつ！？マジ？」

リンが見覚えのある空色の頭を確認すると、しばらく黙っていた完司ファンの友達が耳に響くような高い大きな声を発した。どうやらこの人はユキのファンらしい。そう言えば前すれ違った時完司のことは微妙、みたいに言っていた。

「なんでユキがこんなところにいんの？」

リンが言おうと思った台詞を完司ファンに取られた。まあ。聞きたいことは一緒だから別にいいんだけど。

「ここ今の俺のバイト先。で、忘れ物取りに戻って来たって訳。」

なるほど、そうですか。こういうピンチの時というか絡まれている時に誰か現れるのってドラマとか漫画の世界だけと思っていただけ、実際にあるもんだなあとか平和なことを思っているとユキが寄ってきてリンの頭の上にポンと手を置いた。

「こいつ俺らの妹みたいなもんなんだよ。だからいじめんな。」

優しい口調でリンをかばってくれるものの、睨みつけているのか怒っているような雰囲気はユキから感じられた。もつともユキの手に頭を押さえられ上を向けないリンは確認することが出来ないのので、あくまでも憶測に過ぎない。

「でも」

「釘、直しとけよ。」

まだ何かを言いたげな完司ファンの言葉を遮り、ユキはリンの頭に手を置いたままスタスタ歩き出し、リンはまた引きずられるようにユキの後ろを付いていく形になった。今日はこんなのばっかだな。

工事現場から歩いてすぐのところにあるコンビニに着くと、ユキはリンに何も言わず完司に電話し始めた。電話越しに聞こえる完司

の声に思わず昨日のことを思い出してリンは体が固まった。決心していた筈なのに、思わぬトラブルがあつて無理やり作り上げていた決心が少し薄くなつてしまつていた。

でも、逃げようとは思わなかった。

「完司来るつて。ここにいたらさつきみたいに絡まれないだろ。じやあな。」

そういつてまたもやスタスタ歩き出すユキを慌ててリンは引き止めた。

「も、もう帰ると?」

「お。方言。俺が居たつて邪魔だろ?」

無意識にリンの口から出た方言に反応しながらもユキあつさりと言問に答えた。

「大丈夫。完司なら受け止めてくれるよ。」

ユキの袖を掴んだリンの手を優しく離しながら、穏やかに言つた。  
“受け止めてくれる”それが何を意味しているかはよくわからないけど、確かにそんな気がした。

「がんばれ、リン。」

そう言つてまたリンの頭の上に手を置いて、やさしく撫でた。大きい手の暖かさに涙腺が緩みそうになつてリンは顔を上げられなくなった。それを見越してか、ユキはリンの顔を上げることなく「じやあな。」と言つてすっかり暗くなつた夜道にあつという間に消えていった。

完司がそのコンビニに到着したのはそれから十分と経つていなかったと思う。

「リン!? ユキは・・・」

電話を掛けてきたのはユキの筈なのに、呼ばれた場所にリンが居ることに完司は最初驚いた様だったが、すぐに冷静になつていつものように話しかけてきた。大体の流れを把握したらしい。

「動いて平気か?」

優しい言葉にただリンは頭をコクンと下げるだけだった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

お互い無言になってしまった。最初、どう切り出せばいいのかわからない。

「腹減った。肉まんでも喰わねえ？」

おなかが減ったのは事実だろうが、とりあえずこの雰囲気はどうにかしようと完司が切り出した。

「喰う。」

元氣のない声でリンがボソツとつぶやくと完司がいきなり笑い始めた。

「な、何？」

思わぬ笑いにリンは困惑する。だって笑えるような何かが今二人の間に起こった覚えがないのだ。

「ごめん。でもさ。すごいテンションが低いのに、いきなり男言葉で、しかも『喰う』って。普段のお前からは想像してなかったからさ、ビックリして思わず。」

そう、新しい名前をリンの口から聞く直前にライブハウスでリンが「すげえじゃん！」と言った時の様に面白さと、違う言い方を聞いた嬉しさで完司は笑ってしまった。

そんないつものような屈託のない完司の笑顔にリンの体を支配していた変な力が抜けた。

「だって最近食べてないからさ。っていつまで笑ってんの！」

大笑いとまではいかないが、まだ声を上げて笑う完司に思わずムキになってしまう。いつも通りだ。ユキが言ったように“大丈夫”。

リンはその言葉を頭の中で繰り返した。



## 11・第一歩

まだ少し肌寒さが残る空気の中、昨日雷の家に行く時に通った公園とは違う公園の階段にリンは完司と並んで腰掛け、久々の肉まんを頬張る。

「美味しい。」

素直な感想だった。お互いにどう切り出せばいいのかわからず、二人は黙々と肉まんを口へと運んでいく。

「昨日、ごめんね？」

肉まんを食べ終えた後、完司と一緒に買ってくれた温かいお茶のペットボトルを軽く握り締めてリンはポツリと言った。

「取り乱しちゃって。」

付け加えるように、やはりポツリと言った。完司は自分のお茶をゴクリと一口だけ飲んでふうつと息を吐き出した。

「『新』って」

その名前を出した瞬間リンの肩が軽くビクッと動いたのがわかった。完司はそれに気付いて言葉が止まってしまったが、聞かない訳にはいかない。覚悟を決めてもう一度気になっていた名前を口に出した。

「『新』って彼氏か？」

若干早口になりながら、一気に言った。リンの視線の先にあるペットボトルを握る手にぎゅっと力が入る。

「うん。」

完司の質問から少し時間が経ってからリンが頷いた。

「福岡の？」

「うん。」

「今も福岡に居るのか？」

いつかの日のような会話。リンに初めて兄弟の事を聞いた日だ。だけど、あの日のようにリンの返事はすぐに返ってこない。

「東京に居る・・・と思う。」

自信なさげに、ずっと下を向いたまま言うリンの姿はいつも以上に小さく見える。

「“思う”って？」

完司はおそろおそろ聞いた。顔を曇らせたリンにどこまで聞いていいのかわからないからだ。もしかしたら、昨日のようにまた取り乱してしまうのではないかと不安になってしまう。

「連絡がないから。」

短い返事からは全てを理解することは出来ない。なので、

連絡がない？いきなり音信普通になった？そしてその新を探す為に東京に来たのか？家族の元を離れて、一人で？高校生の女の子が？なんて考えが完司の頭の中をよぎっている。

「まだ、目が覚めていないのかもしれない。」

完司が考えたシナリオとはどうも違う話の様だ。そうだ、勝手に考えないで、リンから聞くことが事実なのだ。

雑念を払って、完司は体をリンの方に向けた。リンの視線は相変わらずペットボトルに向けられている。その体勢のまま完司はリンが話すことを、一言一句逃さぬ様にじっと聞いた。

リンが話してくれた内容は、完司が思っていたよりもずっと過酷なものだった。

「東京？」

「そ、姉貴がさ、リンと来れるなら来てっさ。」

福岡県のある学校の図書室の隅で、本を読まずにリンは話をしてきた。その相手はもちろん、新。周りと馴染めずお互い一人来ていた学校の図書室で知り合い、いつからか付き合うようになった。付き合い始めてからもう一年半くらいになるだろうか。新のお姉さんである亜貴あきとも仲良くなっていた。

「向こうでの生活も落ち着いてきたし、今ツリーとかイルミネーションが綺麗だからどう？って。ホテルも系列のところだからタダで

よし。どうだ？」

亜貴はこの秋に結婚して東京へと行ってしまった。新の家はホテルやレストランなどを経営している家で、亜貴は現在東京のホテルを管理している。

「行きたいな。貯金下ろせば飛行機代なんかかなりそうやし。でも、本当にタダで泊めてもらっていいと？」

宿泊代がいらないうことは、バイトもしていない高校生にとつてはかなり大きい。でも、話を聞いて調べた限りでは結構豪華なホテル。そんな料金がかかりそうな部屋にタダで泊めてもらうのは少し気が引けてしまう。

「いいって。こんな時くらいは家を利用してやれば。」

新が冷めた様な目で、投げ捨てるように言った。新はある事情から、亜貴を除いて家のことを嫌っている。

「来年の今頃は受験勉強で忙しいだろうし。」

現に三年生と思われる人達が一心不乱に図書室の机で勉強をしている。二年生になった時から進路の話は度々出ていたが、希望進路のないリンにとっては不愉快な光景でしかなかった。それに、雰囲気はピリピリしており、陰の空気が漂っていて近寄れない。

「うん。」

リンは進路の不安を口にすることなく、とりあえず頷く。

「じゃ、早速計画立てよっか。外に出ようぜ。」

リンはクラスの違う新と放課後こうして図書室に集まり、日が暮れるまで一緒に本を読んだり喋ったりすることが毎日の日課である。元タインドア派の二人が外でデートすることはあまり多くないが、こんな時は別だ。勉強に励む三年生の横で楽しく旅行の話なんて出来る筈がない。

「うん。どこに行く？」

普段クールなリンの顔に常に笑顔が滲み出ている。それだけ、新への思いが強いのだろう。『旅行』という刺激的な出来事があるから尚更だ。修学旅行が北海道である高校に通っているリンにとって

は初めての東京となる。東京ではないが、あの有名な遊園地にだって行きたい。

考えるだけで、楽しくなってくる。

実際に楽しい旅行の筈だった。

細かく言うと途中までは楽しかったんだ。

「明日福岡に帰っちゃうのね。寂しいなあ。」

「何言ってるんですかあ。素敵な旦那さんが居るじゃないですか。」  
あつという間に訪れた東京での最後の夜、亜貴と新の三人で宿泊するホテルのレストランで夜景を見ながら食事をしていた。こんなに素敵な場所、社会人になってある程度お金を稼いでからじゃないと来られないと思っていたのに。付き合っている新の家がたまたま経営しているからと言って来られるなんて、すごく贅沢で幸せだ。

「リンちゃん。新のこと、これからよろしくね。」

亜貴から毎回と言うほど、会う度に言われている言葉にリンは笑顔で頷く。そしてその度に新が恥ずかしそうにしている。

「全く、姉貴ってばいつまでたっても小さい子ども扱いだし。」

食事を終え亜貴と別れた後、部屋へと向かうエレベーターの中で新がぶつぶつと文句を言っている。これもいつもの光景である。

「仕方ないって。亜貴さんにとったら永遠に弟っちゃんもん。」

そしてリンのこの台詞も、もはや決まり文句である。

「そうだけどさ。」

そんな他愛ない会話をしていると、部屋に着いた。

「すごい。綺麗！」

部屋のドアを開けると、窓から東京の夜景がすぐに目に入ってきた。

た。昨日は有名な遊園地の近くにあるホテルに泊まった為、この部屋に泊まるのは今日が初めて。こんな素敵な部屋にタダで泊めてもらえるなんて、本当に贅沢で幸せだ。

「新、ありがとう。」

「いや、このホテルに泊まれるのは俺の力じゃないから。」

夜景に感動したリンの心からのお礼に、新が淡々と言った。確かに新の言うことは正しいのだが、何ともムードのない台詞である。

でも、そんな飾らない新がリンは好きなのだ。

「新と出会ってから、世界が変わった。」

リンは夜景に見とれたまま、話を続けた。

その話は嘘でも大げさでもなかった。中学時代、友達関係がこじれてから周りをつるまなくなった。その心の寂しさを埋めてくれるのが本だったので、高校に入ってからほとんど毎日図書室に通っていた。そんな時、同じく周りに馴染めない新と出会って一人じゃなくなった。

「俺だって。」

いつの間にかリンのすぐ後ろに来ていた新に、後ろから抱きしめられた。新の暖かい体温と、心臓の音が伝わってくる。

付き合い始めてから一人じゃなくなったのはリンだけじゃない。

俺だってお前と付き合い始めて一人じゃなくなったんだ。そう言葉には出すのは恥ずかしいから、新はその分リンをぎゅっと強く抱きしめる。

「これからも一緒におってね。」

おってね〃居てね

涙声にハツとして、リンの顔を覗き込むと目に涙が浮かんでいることに気がついた。

『ずっと一人やったけん、この幸せを失うのが怖いと。』

新はいつの日か、リンが言っていたのを思い出した。その時も「俺だって」って思った。

「こっちの台詞だよ。」

いつもだったらかつこ悪くて言えないけど、旅行という開放感とこの夜景を前にしたらすんなり言えた。それに感動したのか、リンの目から涙がポロリとこぼれた。その後の笑顔を見ると新はキスをせずにいられなくなった。

好きだよ。

二人共不器用で口下手だから言わないけど、その想いを確かめ合うように二人は長い夜を過ごした。そのまま二人で夜に溶けてしまふかのように、何度もお互いの体温を感じ合った。

どうかこの幸せが永遠に続きますように。  
強くそう祈った。

## 12・絶望の始まり

「体、平気か？」

お昼ごはんをどこで食べよう、という話になった時に新が何の脈絡もなく聞いてきた。

今年は例年を下回る寒い年で、今日も例外ではなく何と雪まで積もっている。滑らないようにいつもよりゆっくり歩くリンの動きは、確かにぎこちない。

「何か、ちよつと辛そう。」

「何でそんなこと言うんだよ！」

最高気温が一桁なのに、リンは顔が真っ赤になるのが自分でもわかった。昨日新と長い夜を過ごして確かに体は少し重く感じるし、寒いから痛い気もする。幸せな時間だったのだけれど、その夜のことをイキナリ思い出すと恥ずかしくてたまらない。

「いや、だって……。ごめん。」

新は何か言いかけた言葉を吞み込んで謝った。

「あ、こつちこそごめん。」

リンも慌ててすぐに謝った。心配してくれているのだ、責めてはいけない。

「行こっか。」

リンは新の手をぎゅっと握りしめて歩き出した。まだどこで昼ご飯を食べるか決めていないが、すぐに見付かるだろう。そんな気楽なことを思いながら。

それが最後に感じた新の温もりだった。

「わ、さっきより積もっとる！」

昼ご飯を食べた後、リンと新は少し距離のある駅へと歩き出す。結局何を食べるか決まらなかったで、コンビニに立ち寄りグルメ本を見て決定したうどん屋さんで昼ご飯を食べた。駅から少し離れているのでそんなに混雑してないだろうという二人らしい理由と写真に載っていた海老天が美味しそうだったからという理由で決めた。

そのうどん屋さんに向かい始めた時から突然強く降りだした雪は、朝積もっていた雪をさらに白く変化させていた。

「もう帰っちゃうのかあ。」

リンはもう帰らなければいけない寂しさを口にしながら、白い一面に一生懸命自分の足跡を付けて新より前を歩いている。福岡ではそんなに雪が積もることはない。だから、雪が積もるところやって歩きなくなる。そんなリンを後ろから見ながら、新は愛おしさからフツと微笑む。

「あ、公園。」

滑らないように慎重に歩いていると、左側前方に公園が見えてきた。電灯やベンチが数個だけある、質素な公園。人が一人もおらず、足跡のない綺麗な雪の白さがまぶしく際立っている。

「リン。」

「んっ？」

公園を見ながら少しボーとしていたリンを、後ろを歩いていた新が呼んだ。

「俺、決めたことがあるんだ。」

新がこわばった顔をしている。こういう時の新は寒いからではなく、家のことを考えているのだと知っていた。だからリンも思わず緊張してしまう。

「・・・っ・・・。」

何かを言いたいのに、上手く言葉がまとまらない。新のそんな様子を向かい合いながらリンはじっと見ていた。二人の吐いた息は積もっている雪のように白く、空へと上りながら消えていく。



「新、今、無理にまとめんでいいとよ？ 帰りの飛行機の中でも、福岡に帰ってからでも。気持ちの整理が着くまで、私ずっと待つとるけん。」

自分の足元を見ながら固まっていた新をまっすぐと見つめながらリンが言った。まだこわばったままの顔で新が顔を上げる。新の不安を和らげることが出来るように、リンは頑張って笑顔を作った。「行く。」

リンは笑顔を作ったまま右手を新に向かって差し出した。手袋を持ってきていない手は雪のおかげもありとても冷たかったけど、でも何とか新を温めてあげたかった。前にリンが落ち込んだ時、こうやって新が手を差し伸ばしてくれたことがあった。あの手の温もりにもどれだけ安堵して落ち着いたことだろう。そのお返しとして、リンも同じように新を救いたかった。「ん。」

新の顔がさつきと一変して柔らかくなった。その表情にリンはほっとする。新がリンの差し出した手に、自分の手を差し出して手を握ろうとした瞬間

キキイッ      ギュルルルルルルッ

どんっ      ドサ      ガンッ

「うっ・・・。」

一瞬目の前が暗くなった反面、頭の中は真っ白になった。

「キヤアアアアアアアアアア！」

さっきまで回りに誰も居なかった筈なのに、どこからか叫び声が聞こえてきた。それに反応するかのように、リンはゆっくりと目を開いた。

ボタッ

目を開き終わると、生暖かい何かがリンの顔に降ってきた。左のこめかみ辺りに降ってきたそれは涙のように頬をつたって下へと落

ちていく。そして次々に上から降ってきて下へと落ちていくそれが  
新の血だと気付いたのは、こめかみ辺りをぬぐった左手にべったり  
ついた赤色をしばらく眺めてからだった。

「あら・・・た？」

自分の上にのっているのが新だということに気付いたのもほぼ同  
時だった。

一体何が起こったの？

気が付いたら周りには人だかりができていた。「大丈夫？」と近  
づいて声を掛けてくれる人もいたけど、リンは反応が来ない。何  
が起きたのか、必死で考えた。だけど、思い出せない。どんなに考  
えても、思い出せるのは新がホツとした顔で手をリンの方に差し出  
してきた瞬間だけだ。

それなのに今の状況は何？

リンを覆ったまま、ピクリとも動かない新。それだけは理解でき  
たリンの頭の中に『死』という最悪の言葉が浮かんた。

やっぱり神様なんていないんだ

残酷な赤色で染まった左手をまだじつと見ながらそう思った。昔、  
辛いことがあった時にそう思ったことがあった。だけど、新と出会  
って、一人じゃなくなつて、神様は居るかもしれないって思った。  
思わないとバチが当たるって。なのに・・・。

フィルターがかかっているようで、ちゃんと目の前が見えない。  
耳を塞がれたかのように、ちゃんと音を拾えない。

しばらくして、人だかりの誰かが呼んだのであろう救急車が到着したが、それで救われると思えなかった。赤いライトが周りを照らし、サイレンの音がしばらく鳴っていたけど、茫然としていることしか出来ないリンにとっては違う世界で起こっていることの様に思えた。救急隊の人が担架を持って近づいてくる様子も、ただドラマを観ているかのように今自分の目の前で起こっていることだとは認識できない。

「リ……ン……」

微かに暖かい息が額にかかり、リンは正気に戻った。

「あら……た。」

気持ちに体が追いついていないかのように、小さい声しか出なかった。でも、それでも精一杯出した声だった。

「待つて……ろ……」

苦しそうに、声を絞り出すようにして新が言った。それと同時に、救急隊の人が新を担架に運ぶ為にリンから引き剥がした。自分を覆っていた新が居なくなつて、一瞬で軽くなった筈なのにリンの体はそこから動かない。

「動けますか？」

救急隊の人がリンに優しく尋ねてきた。しかし、リンはその人でなく担架の上に横たわっている新の顔をじっと見た。目も口も閉じられているが、確かにさつき「待つてろ」って言った。

神様なんか信じない。

だけど、新が言ったことは信じるよ。待つてるよ。だから、どうか死なないで。

待つから。

ぐらりと世界が歪んだと思ったらリンはそのまま意識を失った。

昨日の夜とは違う、暗闇の中に落ちていく。

救急隊の人がとつさに肩に手を回して支えたが、その感触をリンが感じることはなかった。自分の下に敷き詰まっている雪の冷たさを感じることもない。

ただ、絶望という暗闇の中に落ちていく。その感覚だけを感じる  
ことが出来た。

### 13・泣いてしまえ

「目を覚ましたら、お姉ちゃんが泣いてた。」

ビックリした、とリンは続けた。お姉ちゃんとは仲がいいし、逆の立場だったら自分も泣くんだらうけど、自分を想って泣いてくれる存在を目の前にするとすごく心に響いた。その時は新がどうなっているかわかっていなかったけど、一人じゃないんだって感じると視界が少し滲んだのを覚えている。

だけど、泣く気力はなかった。

「リンのお姉さんは、リンのこと本当に大事なんだな。福岡から東京にすっ飛んできたんだろ？」

今の御時世、福岡から東京に来る手段なんていくらでもある。でも、決して短時間とはいえない時間を掛けて飛んでくるなんて愛がなきゃ出来ることではない。家族と折り合いの悪い完司には羨ましく思えた。

「お父さんは長期出張が多いし、お母さんも私が中学生の頃から仕事再開してバリバリ働いてて、お兄ちゃんとお姉ちゃんが保護者代わりなの。」

家族の話になると、リンの雰囲気少し和らぐ気がする。リンの雰囲気は張り詰めていることが多くて、必死に何かを抑えているように見えたのは今まで一度や二度じゃない。

「『新』は？」

本当は聞きたくなかった。和らいだリンをまた暗い表情に戻したくはないし、何より好きな女の子の口から他の男の話なんて聞きたくない。

でも、聞かなければリンはきっと何かを抑えたままだ。

「植物人間状態。今も、目を覚ましていない……」  
「箒？」

思ったとおり、リンの顔はまた暗くなった、そんなリンを見て心

が痛んだが、完司はふと湧いた疑問を躊躇することなくぶつけた。

「連絡が来ないから、わからない。」

「『新』から？」

「ううん。」

リンは首を横に振った。その間、初めてリンの兄弟について聞いた日から早くも少し伸びた髪の毛が軽やかにふわっと広がる。

「あ、違わないかも。でも、連絡をくれるとしたら亜貴さんだと思う。」

だってもし最悪のパターンになったら新が連絡できる訳がない。

その考えは気を抜いたらいつも浮かんでしまう。

あの日、新がリンの手を握ろうとした瞬間、雪でハンドルを取られた車が後ろから新の体を吹っ飛ばした。空中へと浮かんだ新の体はそのままりんへと向かい、リンを下敷きにした状態で電柱へと激突した。その時リンの携帯電話は鞆ごと車のタイヤに潰され、粉々になってしまった。携帯電話は買い直したものの、新の連絡先も前の携帯電話ごと消えてしまったのでこっちから連絡を取ろうと思っても取る事ができない。

仮に連絡先を暗記していたとしても、きっと連絡することは出来なかっただろうけど。

「新しい携帯を持ち歩かないのも、それが原因なの。」

連絡を待つてしまうから。手元に携帯電話があったらいつ連絡が入るのか気になって仕方なくて、何も手がつかなくなってしまふ。

だから普段は持ち歩かないし、家でも基本的に電源を切って一日に一回、たった数分間だけ電源を入れるという日々を過ごしていた。「病院に会いに行かないのか？」

「行けないよ。目を覚まさない新の姿なんて、見れない。」

あの事故の後、新の下敷きになり電柱に突っ込んだリンは全身打撲となり、しばらくベッドに固定される日々が続いた。幸い骨折はしていなかったので、しばらくじっとしていれば痛みは治まり体は動かせるようになったけど、寝たきりになっている新をみて身動き

をとれなくなつたのを覚えている。

「ドラマとかで色々声を掛けると意識が戻る、とかいう話あるけどさ、私は何の反応もない新を前にそうすることは出来なかった。」

リンの声で涙が溢れてきているのだとわかったけど、その涙を完司はぬぐうことができない。ぬぐったら、きつと抱き寄せてしまう。

「だから亜貴さんに、もう来ない方がいいって言われちゃった。」

それはもちろんリンを心配してのことだった。痛みが治まったとはいえ、リンもそれなりの怪我をしたのだ。これ以上精神的な負担がかかると、リンの体に良くない。それに最悪のことを考えるともう新のことは忘れた方がいいのかもいいのかもしれない。

亜貴は泣きながらそう言った。

「何かあつたら連絡するからって……」

その時のことを思い出すと次から次に涙が溢れて、リンの目からこぼれた。

亜貴の言うことも理解できた。だから何も言えなかった。本当は新の傍に居たいのに、力になりたいのに。でも、どうすればいいのかわからない。何も出来ない。昨日の様に泣くことさえ出来なかった。

私は、弱い。

「で……でも、福岡には……っ……戻れなかった。新とのっ、思い出が……溢れてる、学校になんて、戻れる……訳が……」

嗚咽しながらリンが切れ切れに喋る。本当は気が済むまで泣いてその後落ち着いて話を聞く方が良かったのかもしれないけど、完司はリンの抑えきれない感情を全てそのまま受け止めたかった。

「それで東京に来たのか。」

完司はずっと疑問に思っていた謎がようやく理解出来た。リンは泣きながら首を縦に振った。

「……戻れない……からって……そしたら、部屋っ……貸し

てつくれ、て……」

ホテルの？と完司はふと疑問が思ったが、さすがにそれは質問しなかった。さすがにそんな雰囲気じゃないことくらいはわかってい

る。  
「新の……こと、思いつ、出さないように……方言も、使わな  
い……ように、してつ……」

必死に自分を抑えた。一度崩れると、もう駄目になるような気が  
して。

「馬鹿だなあ、リンは。」

完司は心の中でつぶやくつもりが、思いつきり口に出してしまっ  
ていた。リンが涙と鼻水を流したまま「えっ？」という表情で顔を  
上げて、しまったという顔をした完司と目があつた。

「あー、だから……馬鹿なんだよ。」

開き直つたかのような完司の台詞は予想外の言葉だつたのだろう、  
リンの涙が止まつた。俺、すぐくね？なんてこれは心の中で思った。  
「忘れることなんて出来ないくせに、そうやって抑えるから不安定  
になるんだよ。」

ずずつとリンが鼻水をすすする音が夜の公園に響く。

「その事故の後、昨日のように泣いたか？」

リンがふるふるつと首を横に振ると、また軽やかに髪の毛が広が  
つた。

「その、亜貴さんとかいう人や自分のお姉さん以外に、今の事故の  
こと言つたか？」

リンがまた首を横に振る。

「一人で、全部乗り越えるつもりだつたのか？」

今度はリンの首は動かなかった。困惑の顔で、完司をじつと見つ  
めている。

「泣けなきや駄目なんだよ、辛い時は。思いつきり泣いて、気持ち  
をリセットするんだ。泣く気力がなかったら、体が元気になつてか  
らでいい。いつでもいいんだ。涙を、体の中に溜めるのだけは絶対



に駄目なんだよ。」

完司はまた涙が溢れてきているリンの頭に両手を置いて髪の毛をわしゃわしゃつとかき乱した。

「なっ、完司・・君？」

驚くリンを無視して、完司は言葉を続けた。

「一人じゃないんだからさ、もう抱え込むなよ？」

完司の手を引き剥がそうとしていたリンの動きがピタリと止まる。思い切り泣いて、そしてぶつかれ。」

完司もリンの頭の上に手を置いたまま、動かすのを止めた。

「リンにはお姉さんやお兄さん、友達、それに俺達も居るじゃねえか。頼れよ。」

肩の震えで、リンがまた泣き始めたのがわかった。完司は抱きしめなくなる葛藤と戦いながら黙ってその様子を見守った。

本当は新なんて待たずに俺の横に居ろよ、といたい。だけど、無理だな。これだけ新への想いを見せつけられるとリンを振り向かせる自信なんてない。

だから、どうか願うよ。リンが幸せになれるように、応援するよ。まだまだ子どもなのに、年上というだけで大人ぶっている俺だけ。『後、俺の個人的な意見だけど、『待つてろ』って言われて待つ必要がない時もあるんじゃないのか？』

泣くことで精一杯なリンの耳に届いたのかはわからない。だけど、それでもいい。今はとりあえず泣いてしまえ。体中の水分がなくなるくらいに。

二人しか居ない閑静な夜の公園で、リンはいつまでも泣き続けた。そして、そんなリンを完司はいつまでも見守り続けた。

## 14・リンの決意

「はあー。」

「そんなことが・・・」

昼休み終わりの屋上で、リンから話を聞いた佳澄と彩女はそれぞれ深いため息をついた。リンは新のことを佳澄と彩女に今までのことと話した。一度に複数の人に自分の本音をさらけだすのは生まれて初めてだと思う。

キンコーン・・・

昼休みの終わりを告げるチャイムが校内に響いても、三人はそこを動かなかった。気温が上がった暖かな空気の中、並んで澄み切った青空を見上げている。

「で、どうすんの？」

「え？」

チャイムが鳴り終わると同時に、彩女が口を開いた。

「タカスンは、このまま待つのか？」

今度は佳澄が聞いてくる。二人の視線が、青空からリンへと移る。リンは青空を眺めたまま、無言で微笑んだ。その表情は柔らかく、落ち着いた雰囲気をもたせていた。

「とりあえず、学年末テストがんばるかな。」

真ん中に居たリンはすくっと立ち上がり、思いつきのびをした。

「はっ？」

佳澄と彩女の声がハモった。

「新の所に行くのに、中途半端な自分では会いにいけないや。」

リンは言い終わるとくるん、と二人の方を向き、そして二人の顔を見つめた。

「待っててくれて、ありがとう。」

作り笑顔なんかじゃない、本当の笑顔でお礼を言った。それに思わず見とれてしまった佳澄と彩女を置いてリンはリンはスタスタ出入口の方へと歩き始めた。

「タカスン？」

佳澄の呼びかけに、リンがピタツと立ち止まる。

「やることちゃんとやって、それから新に会いに行こうと思う。学生の本分は勉強、なんてそこまで真面目じゃないけどさ。でも、勉強は嫌いじゃないし何か少し自信になるようなことがあった方が堂々と新に会いに行ける気がして。だから、来週から始まるテストを頑張ろうと思うの。」

あの事故の後からリンは自分を中途半端だと思っていた。授業もちゃんと受けず、誰にも心を開こうとせず、かと言って新に会いに行くことも出来ず、ただ生きていくだけだった。

そんな自分では新に会えない。胸を張って新に会いたい。その為に手っ取り早いのは、まず勉強しか思いつかなかったのだ。

「授業戻るね。話聞いてくれてありがとう。」

そう言ってリンはあつという間にドアの向こうへと消えてしまった。

「一方的に喋って行っちゃった。」

「意外と自己チューだな。」

自己チュー＝自己中心

リンが居なくなってから少しボー然とした後、二人で顔を見合わせてどちらからともなく笑い出した。

「パネエ！」

久々に飛び出した「パネエ」が、同じように授業に出ていない生徒が数人居る屋上に笑い声と共に響いた。

二月の終わりの、春の日差しを感じる日の事だった。

「こんにちは。」

テスト頑張る宣言から一日経った火曜日の放課後、リンは図書館

に来ていた。

「おお、リンちゃん。いらっしやい。」

カウンターに立っていた浦田さんがニッコリ笑いながら迎えてくれた。

「本、返しにきました。来週テストなんで、しばらくここに来るのはお預けにしますね。」

そう言っただけでリンはカウンターの上に鞆を置き、借りていた本をせかせかと取りだして浦田さんに手渡した。

「そうか、寂しいけど仕方ないね。頑張りなさい。」

自習禁止の図書館なので引き止めることはなく、リンから本を受けとりながら浦田さんはただ応援のメールだけを送った。

「はい。完司君は本を並べてるんですかね？」

パツと周りを見渡した感じ、完司の姿が見えない。浦田さんがカウンターに居るといふ事は、完司はおそらく本を並べているに違いない。浦田さんもそうだよ、という風に頷いた。

「あ、居た。」

噂をすれば何とやら、本棚と本棚の間の通路をリンに背を向けて歩く完司の姿を捕らえると、パタパタと追いかけた。

「完司君。」

「おお、リン。いらっしやい。」

浦田さんと同じ反応を示したので、思わずフツと笑みがこぼれてしまった。

「何？」

「うっん、何でも。完司君、私来週テストなんだ。」

完司の質問を無視して、さっさと本題に入り出す。いきなり話題が変わるのはもう慣れているので、完司はそのまま聞き入れ、浦田さんと同じように応援のメールを送った。

「ちゃんと勉強してテストを受けて、そしたら新に会いに行こうと思う。」

背筋を伸ばして真っ直ぐと完司を見据えて言った。自分を抑えて

いた頃と違って、すっかりした顔つきになっている。

「・・・・・・・・そうか。」

完司はそれしか言えなかった。正直好きな女の恋路を応援したくないという気持ちもあるけど、立ち直り始めているリンに勘付かれないようなるべく平静を装った。

「じゃ、もう帰るね。」

「おう。テスト終わって、時間あるなら来いよ。」

「うん。」

すぐに方向転換して足早に歩き出したリンは浦田さんに挨拶してあつという間に姿が見えなくなった。リンの姿が視界から消えると、完司はハアッと一息着き、気持ちを切り替えてまた仕事に取り掛かり始めた。

「へっ？」

今日の勤務も終わり、帰ろうとした頃浦田さんが完司を食事へと誘った。

「今日は歌の方もないんでしょう？ だったら家にご飯食べにおいで。妻も久々に会いたがっているよ。」

確かに今日はバンドの練習がない。浦田さんの奥さんにも最近会ってないし、久々に美味しい手料理をごちそうになるかな、と思って完司は「はい。」と二つ返事をした。それが浦田さんなりの励ましだと、完司は気付いていた。

「今日は温かったねえ。」

一緒に図書館から出ると、冬の刺すような痛い寒さを感じられない空気を感じて浦田さんがほのぼのと言った。

「そうですね。」

「桜の花が咲くのにはもう少し時間がかかるねえ。」

「もうそんな時期なんですね。」

完司はバンドを結成し始めてもう一年になるのか、と心の中でつぶやいた。去年、桜の花が散り始めた頃に完司達四人はグループを

結成した。まさか自分の人生に音楽が欠かせないものになるなんて、あの時は思いもしなかった。

「咲いた花が散って、また新しい花を作る。もしかしたら植物は人間よりずっと強いのもかもしれないね。」

「えっ？あ、そうっすね。」

穏やかな性格からは想像できない速さで歩き始めた浦田さんに、完司も慌てて後ろを付いていく。

「でも、人間も自分達で思っているよりはずっと強いんだよ。だから完司君、いい歌を作ってまた聞かせてね。」

「あ、新曲の歌詞チエツクまだしてねえ。」

何が『だから』なのか疑問に思う人がいるかもしれないが、色々な経験を積むと歌い方にも違いが出てくる、と昔言われたことがある。つまり、失恋をしてさらに歌に味が出る様歌手としていい経験に変えなさい、という浦田さんなりの応援なのだ。

浦田さんと出会って約五年、言葉が少なくても浦田さんの言いたいことは大体わかるようになった。と、思う。

「今日は生姜焼きだつて。」

「やった！」

浦田さんが晩御飯の献立を教えてくれて完司は喜んだ。成人になったとはいえ、まだまだ完司も子どもだ。そんな完司を微笑ましく見ながら浦田さんは相変わらずのスピードで歩いていく。

二人の姿が夜の暗闇の中に消えていっても、楽しそうな話し声が途切れることはなかった。

## 15・キスで目覚める！？

「終わったぁー。」

「あー、マジやべえかも。」

学年末のテストが終わった瞬間、彩女からは嬉しさの聲が、佳澄からはうなだれの聲が聞こえてきた。佳澄は国立系のクラスを狙っているため、それなりの成績を取らねばならない。勿論希望者の数にもよるが、点数がいいにこしたことはない。

「で、タカスンは・・・」

二人の視線がリンの方に向くと、リンもそれに気付いて二人の方に近づいてきた。リンは最近では珍しくなくなったニッコリ顔で、右手でブイサインを作った。

「すげえ。最近まで授業中ほとんど寝てたヤツが。」

「やつは超進学校にいっただけあるなあ。」

二人がハァー、と深い息をつきながら呟いた。

「いやいや、進み具合が向こうのが早くてかぶってる部分があったから。」

「それでも出来ない人は出来ないってえー。」

「やつはタカスンはパネエよ！」

慌てて謙遜するリンに、二人の呟きは終わらない。

「これからが、大変だな。」

ボソッと呟いたリンの一言に二人が驚きの表情で顔を上げた。

「あ、今から新のところに行くから・・・」

「もう？」

「すぐに？」

二人の顔が一気に真剣になり、リンの顔をじっと見た。リンは落ち着いた顔でこくり、と黙って頷いた。

「行つてらっしゃい。」

佳澄と彩女の、重なった背中を押す一言にリンは相変わらず強い

眼差しで返事をした。

「行つてきます。」

とうとう来てしまった。

大きい病院の前に辿り着くと、リンは大きく深呼吸をした。自分が退院してから一度も来ていない病院に、懐かしさは全く感じない。一応新の入院している部屋を受付で確認すると、最後に新の姿を見た部屋と変わっていないかった。全てあの時と変わらぬまま、時間だけが過ぎているのだろうか。新の部屋の前まで来てそう考えると、なかなかドアを開く事が出来ない。

少しの間、ドアの前で立ち尽くしていると

「リンちゃん？」

今度は懐かしい、と思える声でした。声が聞こえてきた方を向くと、亜貴が立っていた。亜貴はリンの姿を見て一瞬驚いた表情を見せたが、すぐにいつもの落ち着いた雰囲気になった。顔色が少し悪い気がする。

「………こんにちは。」

「こんにちは。」

失礼なことに、リンは亜貴に会うことを頭に入れてなかったので一瞬固まってしまったが、とりあえず挨拶をした。

「体はもう大丈夫なの？」

亜貴の優しい気遣いに、リンは黙って頷いた。

「新に、会いに来たの？」

少し不安を顔に浮かばせた顔で、亜貴が続けて質問をしてくる。

「はい。」

今度は口に出して返事をする。

「もう、逃げたくないんです。」

亜貴を真っ直ぐに見つめて率直に言った。

「ありがとう。新を、宜しくね。」



亜貴の口からはまたいつもの決まり文句が出たが、いつもと違うことが二つあった。一つは、この台詞の後に決まって照れる新がここに居ない事。そして、もう一つは亜貴が本当の笑顔じゃないこと。「じゃ、私は邪魔だろうからもう帰るわね。」

「亜貴さん！」

足早に去ろうとした亜貴を、リンは慌てて引き止めた。亜貴はピタリ、と止まった。

「私、事故の後、正直東京に来なければ、と思っていました。」

亜貴に何を言うかを頭の中でまとめていなかったのが、とりあえず何かを言わなくてはいけない。その気持ちでリンはとりあえず言葉が続けた。

「高校生なのに贅沢したからバチが当たったんだ、とかあの日うどんなじゃなくてパスタにしていれば、とかそもそも東京に来なければ、とか思えば思うほどキリがなくて。」

亜貴はリンに背中を向けたまま黙って話を聞いている。

「でも、事故にあって気付けたこともあるんです。自分一人では立ち直れない弱さ、新への依存度の強さ。」

一人で生きていけない事など、とうの昔から気付いていた。でも、それを認めてしまうと自分は弱いんだって認めることになる。だから頭の中ではずっと否定していた。

それが弱さだと、気付いた。

「私、自分がすごく弱い人間だって気付いたんです。」

その弱さは新への負担になっていたのかもしれない。そうだけでなく、きっと自立心の強い新にとって負担になる日がいつか訪れていただろうと思えた。

「だから、私強くなります。悪いことでよくよするだけじゃなくて、いいことを拾ってプラスにできるように。」

話しているとリンの視界が滲んできた。でも、完司が泣きたい時は泣けばいいんだと教えてくれた。だから我慢なんかない。

「新と東京に来たことは後悔していません。楽しい思い出も作れま

したから。亜貴さん、東京に招いてくれてありがとうございます。

「亜貴の肩が震えている。泣いているんだ。」

きつと優しい亜貴はずっと自分を責め続けているに違いなかった。自分が誘わなければ、と。

「仕事に、戻るわね。」

亜貴はそう言って振り返ることもなく、足早に歩いていった。今度はリンは引き止めなかった。どうか、リンの後悔していないという気持ちが伝わって少しでも罪の意識が軽くなればいい。大好きな亜貴に、また笑って欲しい。リンは心からそう思った。

亜貴の姿が完璧に見えなくなると、リンは再びドアの方を向いて今度はためらうことなくドアを開けた。個室のため、一個しかないベッドに新の姿を確認できた。

「懐かしい曲。」

ドアを開けると二人でよく聞いていた曲が流れてきた。

後から知ったことだが、意識を失っている人にはとにかく刺激を与え続けることが大事で、マッサージのように手や足を動かすことも効果があるし、人間の五感で最後まで生き残る耳からの刺激を常に与えることも良いとされているらしい。だから新が一人の状態の時はこうやって音楽を流しているのだった。

リンは真っ直ぐにCDプレイヤーの元に歩き、そして一時停止のボタンを押した。自分の声だけを新へと届けたかったからだ。

「新。」

リンはCDプレイヤーから新への方へと体の向きを変え、近づいた。

「弱くてごめんね。」

返事の返ってこない新を目の当たりにすると、やっぱり悲しい気持ち込み上げてくる。思っていたよりも、ずっと辛い。

でも、負けない。負けるもんか。

「これからは出来るだけ毎日来ようと思う。出来るだけ、ね。」

新がまた目を覚ますことを信じて頑張ろうと思う。女が男の目を覚まそうとするなんて『眠れる森の美女』の逆だな、と思った時ふとした考えがリンの頭の中をよぎった。

「王女は王子のキスにより目覚めたんだよね。」

確かにそうだけど、私は何を考えているんだ、とリンは全身が熱くなった。でも、もしかしたら、なんて希望も湧いてくる。可能性が少しでもあるなら、たとえ笑われても試してみたい。

そう思って新の顔へ、自分の顔を近づけた。どちらかと言えばキスは新からしてくるのを待っていたけど、今回は……

「やっぱり、無理!!」　　ゴン　ドサッ

あともう少しでお互いの唇が触れるところでリンはそんな少女キヤラじゃない!と叫ばんばかりに体を後ろへ逸らした。それと同時にプレーヤーの置いてある棚の角に体をぶつけ、落とした鞆が足に直撃し、思わずその場にうずくまる。

「私は一体何をしているんだ。」

自分の馬鹿さ加減に呆れながら、リンは一瞬痛くなった体をゆっくり起こした。そして棚にぶつかった衝撃で再び流れ始めた音楽を止めようと、プレーヤーのボタンを押そうとした時に異変を感じた。

「リ、ン？」

亜貴の時よりも、懐かしいと思える声が耳から入ってきた。リンは金縛りにあったように、体が動かない。

「リ、ン？」

反応のないリンに向けて、また懐かしい声が聞こえてきた。リンは、おそろおそろ振り返って新を見た。

新の顔がリンの方を向いている。さっきは真っ直ぐ天井の方を向いていたのに。

新の目が開いている。さっきまで硬く閉じられていたのに。

「リ、ン。」



いつまでも流し続けた。

## 16・これからが正念場

「マジか!？」

「おめでとう!」

新が目を覚ました次の日、リンは朝学校に着くなり佳澄と彩女へと新が目を覚ましたことを報告した。

「良かったなあ。」

「でも鞆を落とすなんて、タカスン意外とドジだなあ。」

二人には鞆を落とした衝撃で目を覚ましたことにしておいた。キスをしようとしていたなんて言うの恥ずかしいし、柵にぶつかったことも理由を聞かれると恥ずかしいのでふせた。多分鞆を落とした音も目を覚ました原因の一つだろうし、嘘ではないとリンは自分に言い聞かせながら、ハハッと笑った。

「でも、これからが正念場だよ。」

目が覚めました。ハイ、これから元の生活に戻りましょうなんて無理な話だった。脳や体に異常が表れてこないか、意識を回復してからもしばらく検査や観察が必要だし、何よりしばらく眠っていたせいで新の体は自由に動かすことができなくなっていた。骨折や筋力の低下などが原因で自分で体を起こすことも無理だったのだ。けれども、

「生きててくれたから、とりあえずそれだけいいや。」

そう思えた。リンの落ち着いた笑顔に佳澄と彩女もとりあえず一安心した。

「新。」

「リン、今日も来てくれたのか。」

授業を終えた後、リンは図書館に立ち寄ることなく真っ直ぐに病院へと向かって来た。

「調子はどう?」

「体が動かない。」

体を自分で起こせないことにイライラしている様子が新の表情から見て取れた。ベッドのリクライニング機能で少し体を起こした状態で、かろうじて顔だけリンの方に動かさせている。

「何か、検査した？」

「午前中レントゲン撮った。骨折は少しずつ回復してるって。」

新は車が突っ込んできたせいで左の肋骨に左の大腿骨（足の上方）、それに電柱に追突する際にぶつけた額とリンの頭を庇って犠牲にした左腕の骨折をしていた。リンがクッションになったことから額は少しヒビが入ったくらいで済んだが、もし思いつきりぶつかっていた時のことを考えるとゾツとしてしまう。

しかし意識がなかったというのに、確実に骨を治癒<sup>ちゆ</sup>していた人間の体はすごい。

「そっか、痛みは？」

「薬が効いてる。でも寝返りうてないから、尻とかが痛い。」

骨折の痛みをほとんど感じないだけでも、マシかもしれない。

「髪、一気に切ったな。」

ベッドの横の椅子に座ったリンの髪を懐かしむような雰囲気で新が言った。

新は結べないほど髪の毛が短いリンを今まで見たことがなく、東京と一緒に来た時にはリンの髪の毛は肩甲骨<sup>けんこうかく</sup>辺りまで伸びていた。

そのほどほどに長かった髪の毛を、リンはあの事故の日の事を断ち切るかのようにバツサリと切り落としていた。

「また、伸ばすよ。」

幸せな日々だったあの頃のように、そして願掛けの一種のようにこれから伸ばしていこうとリンはたった今決意した。

「あ、面会時間もう終わりかあ。」

この病室で約三時間半過ごした頃、面会時間の終了を告げる放送が病院内に流れた。

「暗いから気をつけて帰れよ。」

新が名残惜しそうに別れの挨拶をする。

「うん。明日も来るね。」

リンは膝の上に置いていた鞆を持って椅子から立ち上がった。元々そんなに喋る方じゃないのに、まだまだ新と喋りたい気分だった。しかし、最低限のルールは守らなくてはならない。名残惜しそうにリンも挨拶をして部屋を去ろうとした瞬間、新に呼び止められた。「キスしたい。」

新が少し頬を染めた状態で、ストレートに物申してきた。そうだが、新はムードなど関係なく自分の考えをズバッと言うタイプなのだ。そういうところがイライラせずに好きなのだが、あの新の目を覚ました時のことを思い出してリンの顔は真っ赤になった。

それにつられて新の顔もさっきよりも赤くなる。

「そんなに照れることか？」

「て・・・照れるよ！」

あの時の事がなくても、自分からキスしようなんて・・・正直思ったことあるけど、実行したことがない。しかも、新からお願いされてするなんて普通に考えたら照れる。でも、

「目、つぶつて。」

恥ずかしいので、リンは新の目を見ずにそう要求した。新はニコツと嬉しそうに微笑んでリンの言う通り目をつぶった。リンは一度ゴクリと唾を呑み込み覚悟を決めて、新の顔へと自分の顔を近づけた。心臓がバクバクしている。

「やっぱり、無理！！」　ゴンドサッ

リンは自分の心臓の音に耐えられなくなって体を後ろに逸らすと見事に昨日と同じようにプレーヤーの置いてある棚の角に体をぶつけ、落とした自分の鞆が足に直撃し、その場にうずくまった。しかも停止していたプレーヤーから曲が流れ始めるということまで一緒だった。

「痛っ。」



何とも間抜けなパターンなのであろう。リンは恥ずかしくて顔を上げることができない。

「今の、何か聞き覚えのある音だったな。」

新がこらえ切れずに少し笑っている。それに気付くとリンの中で益々恥ずかしさが込み上げてくる。

「よくあるような、珍しい音じゃないよね。」

リンは気を取り直して鞆を持って立ち上がる。あの時の事は絶対に教えてあげない。そう心で思うリンと何も知らない新の目が合うと、二人は吹きだして笑い始めた。

こんなに大声で笑ったのは一体いつぶりだろう。ましてや二人でこうやって笑うのは初めてかもしれない。

「新。」

「ん？」

「もう少し、度胸が付くまで待って下さい。」

「何で敬語なんだよ？」

そう言ってまた新が笑い出す。新がこんなに笑うなんて、知らなかった。こうやって笑う日々がずっと続けばいい。体を自由に動かせないけど、笑って過ごせたら何とかかなりそうな気がする。リンはそう思った。

だけど、現実はそのなにごくなかった。

「新 ってあら。」

次の日もリンは図書館に向かわずに、学校から病院に直行して来た。病室のドアを開けると新は眠っており、代わりに亜貴が迎えてくれた。

新が目を覚ました日、すぐに亜貴に連絡した。すると電話の向こうで泣き始める声が聞こえて、またもやリンと一緒に泣いた。それ以来、二日ぶりである。顔色が二日前よりも大分良くなっている。

「検査もだけど、今日リハビリ計画も立てたりしてね。少し疲れたみたい。」

「そうですか。じゃあ目を覚ますまで待ちます。」

あいにく最近図書館に行っていないので、暇つぶしとなる本がない。何をしようか、とリンが考え始めると机に置かれた資料が目に入った。検査結果や、今後のリハビリ計画などが書かれている。

「私、もう行くわね。新しいCD持ってきたから、たまに流す曲変えてもらっていい?」

仮にもホテルの管理者、亜貴はリンの返事を聞く間もなく忙しそうに部屋を出て行った。

リンは早速新しい曲を掛け始め、椅子に座って机に置かれていた資料に目を通し始めた。専門用語の難しい漢字は読めないし、よく意味も理解できないが、簡単には治らないと悟ることは出来た。

「これからが正念場。」

リンは佳澄と彩女の前で言った台詞を、もう一度自分に向かって言った。

一番辛いのは新なんだ。だから、私も覚悟して取り掛からなければいけない。

「一緒に頑張ろうね。」

眠っている新に向かってリンはつぶやくように言った。

## 17．いつまでこのまま

「おはよう。」

「リン、久しぶりだな。」

学校が休みの土曜日。病院の面会時間は午後からなので、リンは空いた時間の午前中に図書館へと足を運び、完司に挨拶をした。二人が知り合ってからほとんど毎日会っていたようなものなので、十日間も会わないのは初めてのことだった。何か少し、照れくさいものを感じる。

「おめでとう。」

切ない気持ちをグツとこらえて完司がリンを祝福した。新が目を覚ましたという次の日、落ち着いた声でリンが電話してきた。あの時も電話越しで祝福したが、直接会った時も祝福しようと思っていた。

だけど、リンの表情は少し元気がないように見える。

「どうした？」

「うん、私に何が出来るかなって。」

昨日新が目を覚ますと、一昨日同様少しイラついているのがわかった。リンと喋る時は平静を装っているが、体が自由に動かないのだ。ストレスが溜まるに決まっている。

「私みたいに少し安静にしてれば治るっていう保障もないんだもん。不安だって強い筈だよな。」

新は思ったことはストレートに言うのに、リンを心配させるようなことを言わない性格だということを知っていた。だから、余計に心配になる。

「そこまで想われてる新は羨ましいな。」

カウンターで少し暇を持て余していた完司がしみじみと言う。からかっているようで、リンは少し恥ずかしくなった。

「リンが会いに来てくれるだけで、十分に力になると思うよ。」

俺だったらきつとそう思う、なんて言えないけど、本心で思ったことを完司は言った。でも、そういう『思う』という抽象的なことでリンの不安は消えないようだった。

「あ、すみません。」

カウンターの前に滞っていたリンは、子供連れの若いお母さんが本を返そうとしていることに気付くとピョコッと一歩横にずれた。今までに何回もやってきたように借りた本を受け取り、返却の手続きをする間リンはじつとその場で下を向いて完司とまた話そうと待っている。

「リハビリ関係の本ってある？」

手続きを一通り終わると同時に、リンが質問してきた。

「リハビリ・・・介護福祉の本ならあったと思うけど。」

「案内するよ。」

またもや、突然背後から浦田さん登場。未だにそれに慣れない自分も進歩がないな、と完司はつくづく思った。そして完司と居る時と違い、ゆっくりと歩き始めた浦田さんについてリンも歩き始めた。一体何度、リンの背後をこうやって見つめたことだろう。

「だから俺は中坊かっての。」

完司はキュンツと切なくなった自分に冷静にツツコミを入れた。

「俺、いつまでこのままなのかな。」

病室で理学療法士から簡単なマッサージを受けた後、二人きりになるや否や新がそう切り出した。

「先生は、何て？」

「長期戦を覚悟しとけて。」

検査をいくつかした結果、新は脳にはつきりとした異常は見られなかった。しかし、体が自由に動かないということだけで不安を掻き立てるには十分だった。クラスで一人で居るのが平気だとしても、まだたったの十七歳。子どもなのだ。

「若いんだから、一年や二年くれてやれ。」

リンだつてまだ子ども。何と返せばいいのかわからなかったけど、無責任な慰めだけはしたくなかった。

「年寄りのような発言だな。」

新の顔が少し柔らかくなつてリンはホツとした。リンは新が早く家を出たがっているのを知っていたので、本当は一年や二年が人生のほんの一部だとしても新にとってはかなり長い年月に感じるだろうと気付いていた。

「年寄りつて……さすがにひどくない？」

花も恥らう乙女の年齢なのに。でも、そうやって憎まれ口を叩けるだけまだ元気な証拠である。

少し経ってから、そう気付いた。

「俺、いつまでこのままなのかな。」

「え？」

新の口から二日連続で同じ台詞が飛び出して、リンは驚きを隠せなかった。

「ごめん。昨日も言つたよな。」

「うつん、謝らないで。弱音はどんどん出さないと。」

完司が言ってくれた言葉とは少し違うけど、弱音も不安も、涙同様に体に溜めてはいけないと思った。

「窓開けようか。今日暖かいよね。」

三月に入り、もう春だと思えることが多くなってきた。

「リン、何か変わったよな。」

開けた窓から入ってきた風に心地良さを感じていると、ふいに新がリンにそう発言した。

「髪の毛のせいじゃない？」

「それもあるかもしれないけど、中身もだよ。」

確かに、東京に来てからリンの中で変化したことがある。それは、本音を言える友達ができたこと。前は友達と呼べるような人が居なかったし、涙なんて見せられなかった。

「それに比べると俺は……」

新の言葉が途中で止まった。明らかに辛そうな顔をしている。

「新……」

リンは何と言えいいのかわからず、ただ窓から入ってくる風をしばらく浴びていることしかできなかった。

「会いに行ってるだけでも大きいよな？」

「うん、そう思う。」

月曜日、リンは佳澄と彩女に自分の不安な気持ちをさらけ出すと、完司と同じ意見が返ってきた。場所はもちろん屋上。

「だといけどなあ。」

新を上手く励ますことが出来ていないと、リンは少し落ち込んでいた。

「大丈夫だつて！」

「自信持て！」

根拠のない発言だが、何故か元気が出てくる。

友達が存在ってこんなに大きいんだ。

「今日もいい天気だなあー。」

「授業なんてありえねえ。」

暖かい日差しにウツトリとしながら話がポンツと飛んだ。まあ女の子同士の話では珍しいことではないだろう。

「もう三年かあ。」

「受験かあ。」

学年末テストも終わり、三人が同じクラスで過ごせるのも後わずかだった。口には出さないが、それを感じる寂しさが漂っている。

三人はチャイムが鳴っても、しばらく屋上を動かなかった。

「おつす。」

「今日はいつもより遅かったな。」

リンが病室に入ると、窓から入ってくる風を浴びながら少しトゲ

のある言い方で新が言った。

「うん、掃除当番で。」

リンはそんな新に一瞬怖さを感じ、思わず嘘をついてしまった。本当は授業が先生の都合で一時間短くなって早く帰れることになったので、三人で思い出作りと題してプリクラを撮ったりコーヒーを飲んだりしているといつもより少し遅くなってしまったのだった。

しかし、新の様子を見ると正直に言えない。仕方ないという理由じゃないと、納得してくれないと思ったからだ。

「今日は何した？」

「マッサージと、リンちょっとこっちに来て。」

「何・・・っ！」

リンが新の促したように傍に近づくと、新が右腕をズルズルと掛け布団の上を滑らせてリンの手を触れるように軽く握った。以前程の力もないし、ひんやりとした手だったが、新の確かな温もりを感じ取ることが出来た。

「マッサージのおかげもあって、多少力が入るようになった。少しだけど、進歩しただろ？」

疲れの滲んだ新の笑顔を見ると、リンの目からあつという間に涙が溢れてこぼれた。

「リン？」

リンは嬉しさよりも、罪悪感の方で胸がいっぱいだった。新はこの嬉しさを伝えようと待っていたのに、私は友達と遊んで嘘をついてしまったなんて。

「涙は、まだふけねえや。」

新は腕をリンの顔の位置まで上げることはまだ無理そうで、少し悔しそうに言う。リンは膝立ちになり、ベッドの高さと自分の顔の高さを同じにして新の手を両手でぎゅっと握り締めた。

「ふけた。」

リン両手に握られた間から、新が指を少し動かしてリンの涙を拭いた。その嬉しさが、表情から見てとれる。

「ありがとう。」

拭ってもらった直後にまた涙がこぼれた。

「リン、俺後遺症残るかも。」

衝撃的な発言にリンは言葉が何も出なかった。

「電柱に突っ込んだ時、頭を打った衝撃でしばらく意識が戻らなかったんだ。組織的に異常がなくても、何か残ると覚悟しておいた方がいいって言われた。」

新は悲しそうな表情をしながら、淡々と一氣に言った。

「先に左腕が電柱にぶつかってクッション代わりになったから幾分マシみたいけどな。」

新の目が少し光っているのがわかってリンはまた涙が出てきた。

「新。新の腕がこのまま戻らなかったら私が新の腕になる。足が戻らなかったら足になる。失明したら・・・」

少しでも不安を和らげたかったのに、その先は流れてくる涙に妨害されてしまった。

「サンキュ。」

新のお礼が罪悪感をより一層強くさせた。

ごめんね。嘘について。

一緒にリハビリ頑張ろうね。

言葉に出来ず、リンは心の中でそう新に伝えた。新はそれを感じ取ったのかのように、リンが泣き終わるまで優しい笑顔ですつと見つめていた。



## 18・帰れ

前頭葉：脳のなかで最も高級（人間らしい）な部分とされています。大きく分けて3つの機能があります。

1・運動機能中枢：錐体路とか錐体外路とか言われるものの出発点です。ここから手足の先まで神経がのびていき、運動します。

2・運動言語中枢：発語に関しての中枢です。

3・精神機能中枢：人間を人間たらしめるのに必要な高次の精神機能の中枢です。意志、計画性、創造性などもここで司っています。ここがやられますと、人格荒廃などが見られます。

リンは家に帰ってから図書館で借りてまだ読んでいない本を読みあさった。中には事故の後遺症に悩む家族の奮闘日記の本があり、脳の中でも大脳の前頭葉という部分の障害を背負った内容に思わず釘付けとなっていた。本には脳の構図も載っており、新が電柱にぶつけた額が前頭葉の部分に当たるとなると人事のようには思えない。「発語と、人格は今のところ大丈夫。」

となると後遺症として考えられるのは手足の運動か。でもぶつけた時に脳全体に衝撃があつたわけだから、結局まだ油断はできないということもわかった。

「素人が少し勉強したくらいじゃなあ。」

リンは本を広げたままベッドにごろんと横たわり、深いため息を着いた。病気や怪我には例外だつてたくさんあり得るみたいだし、知識を得たとしてもあまり心の気休めにはならなかった。

「治りますように。」

そう願うことしか出来ない。完治して、また以前のように戻ることとは奇跡なのかもしれない。

だけど、そう願わずにはいられない。

先生や医療スタッフが言うには新の経過は良好なようだった。新の治りたいという意志も強く、若いことから勢いもある。しかし、いきなり回復するわけではないので新のイライラは日増しに増えているように感じる。

「まだこれだけかよ。」

かろうじて握れるようになった新の握力測定値は二十キロ。男子高校生平均の約半分の値だ。その結果にショックを受けた新の右手を、リンは握りしめた。

「思いつきり握って。」

リンの意図が分からないまま、新はとりあえず今出せる力でリンの手を握る。

「握られてる感触は十分にあるよ。」

正直な感想だった。確かに相変わらず力は弱くて冷たいけれど、握られたその手からは新の必死さが伝わってくる。

「少しずつ、ね。」

暫くそのまま握られていると、一度緩んだ新の手にまた力が入った。

「少しずつ。」

新は無言でリンを握る手に何度も力を込めた。リンはその度に新の力をしっかりと感じていた。

「リンちゃん、ちょっといい？」

帰ろうとしていたリンは今病院に着いたばかりと思われる亜貴に呼び止められた。面会時間はもう終わりなのに、どうしたんだろう？と首を傾げながらリンは亜貴の方へ近づいていった。

「義明兄さんに会ったりした？」

名前を聞くと一気にリンの顔が引きつった。義明兄さんとは亜貴と新の兄に当たる人で、完司らNEXのスカウトに訪れていた長身の男のことだ。

「今日たまたま会ってね。新が目を覚ましたことは耳に入っていた

みたいだけど、リンちゃんが毎日訪れているのか？とか聞いてきてね。東京に居るの知っててビックリして。」

亜貴が心配してくれているのがわかる。義明は新ら兄弟の長男に該当し、当然跡継ぎのつもりで育てられ、育ってきた。しかし、祖父である会長は新を後継者にと考えており、父親に当たる社長や義明と対立をしていた。

継ぐ気のない新は幼い時から目の敵にされ育ったため、家のことを忌み嫌っている。

「この前、偶然会いました。」

福岡の親戚宅から高校に通っていた新の家に行った際、何度か義明に会ったことがあったが好きにはなれなかった。新共々見下され、新が飛び掛って喧嘩になりかけた事だつてあるし、何より事故の時に嬉しそうにしていたのが許せなかった。

「新のこと、何か言っていました？」

「事故のことは役員にも広まってるから、その手前一度は顔出ししないと、って。」

今の新に義明が会うことが良いとは思えなかった。何とかして阻止したいけど、リンにそんな力は無い。それがわかるから悔しい。

「リンちゃん、これからこうやって新に会いに来てね？」

亜貴も同じことを思っているようで、不安な顔つきをしている。

リンは頷き、鞆を握っている手にギュツと力を込めた。

義明の動きは早かった。学生と違って、生活のかかっている社会人はみんなそうなのかもしれない。亜貴と会った次の日、新の病室に行くのと新よりも先に義明の姿が目に入った。反射的に嫌な顔つきになる。

「可愛い弟のお見舞いに来たのに、感謝されないなんて悲しいものだな。」

建前で来たくせによく言うよ、と嫌な気持ちとは反して義明は心なしか楽しそうな気配さえある。リンは嫌な顔つきを崩さず視線を

床へと移した。

それにしても、聞き覚えのある音楽がどこからか耳に入ってくる。一度しか聞いてないけど忘れない、NEXの曲だ。一体どこから聞こえてくるのだろう。

「スカウトするつもりだったからね。等身大の彼らを撮っていたんだ。あ、建物のオーナーにちゃんと許可をもらってね。」

そう言っただけで義明はリンの居る出入り口の方にツカツカと歩いてきた。

「じゃ、忙しいので失礼するよ。」

一方的に喋って義明はあつという間に居なくなってしまった。何が言いたかったのか全くわからない。

「新？」

リクライニング機能で体を起こした状態の新しい手元にはビデオカメラが置かれており、そこからNEXの曲が映像と共に流れていた。

「新？」

リンの呼ぶ声に反応せず、新はビデオカメラをじっと見ている。

リンは近付いて再生されているビデオカメラを覗き込んだ。客席の方から撮ったと思われる映像の端っこには、ステージの傍らで聞いていたリン達三人もバツチリと映っていた。あの日の自分を見るとまるで別人のようだ。

再生が終わって部屋の中が静かになっても、新は喋ることなくただビデオカメラの画面をじっと見続けている。

「新？」

リンの三度目の呼びかけにようやく反応し、新が顔を上げた。

「これ、いつ頃行ったんだ？」

「え？ええと。」

マメな事に手帳に予定を書いていたことを思い出し、リンは鞆を開けて手帳を取り出すとハハリ、と挟んでいたプリクラが手帳の間からこぼれ落ちた。

「「あ。」」

二人の声が重なった。こぼれ落ちたプリクラはビデオカメラの辺りに落ち、しっかりと新の視界に捕らえられた。佳澄と彩女と三人で初めて撮ったプリクラには、ご丁寧なことに日付が書かれている。「この日付・・・。」

リンの罪悪感が一気によみがえった。掃除当番と嘘をついてしまったことを未だに新には黙ったままだったのだ。

「あの、ごめんなさい。」

「何で謝るんだよ？」

素直に謝るリンに、予想外の反応が返ってきた。

「俺が居なくても、大丈夫なんだな。」

「え？」

「俺はもう、必要ないんじゃないのか？」

「新？」

何を意味しているのか、リンは理解できなかった。

「リン、もう来るな。」

目も合わせてくれない新の考えをリンは必死に読みとろうとしたが、ショックで何も考えられない。

「別れよう。」

嫌。

「俺の人生に、これ以上お前を巻き込むわけにはいかないよ。」

嫌。そんなの嫌。

「もう、帰れ。」

嫌だ。

自分の気持ちを何故か言葉に出来ず、リンはただ涙を流すことしか出来なかった。そんなリンの涙を拭おうとも見ようとせず、新はいつもより低い声で言葉を続けた。

「帰れ。」

嫌だよ。

言葉が出ないので、首を横に振って気持ちを表した。

「帰れ！」

相変わらず目を合わせず、新が怒鳴るように叫んだ。今まで一緒に居て初めてのことだった。

リンは泣いたまま病室を走って飛び出した。病院の中は走らないなんていうマナーは頭の中から消え去り、ただ新のことだけで一杯になっていた。

ごめんね。

リンは泣きながら、そう思うことしか出来なかった

## 19・別れの真相

「あれっ、リン？」

仕事も終わり、図書館も締め切って帰ろうとした頃、完司は図書館の前に見覚えのある一人の少女が立ち尽くしているのに気が付いた。

「どうしたんだよ、病院は？新は？」

完司は近付きながらいつもと違うリンの雰囲気気が付いた。泣いたことが一目でわかるように目は真っ赤で、涙が浮かんでいる。

「リン？」

「ふられ、ちゃった。」

リンは必死に笑顔を作っていたが、声が途切れるほど泣くことを我慢しているのが見え見えだった。

「いいぞ、泣いて。」

完司がそう言った瞬間に、リンの目から涙がポロッと落ちた。きつと完司を待っている間、こうやって我慢していたのだろう。

「私、最低だ。」

涙と共にリンの口からこぼれた言葉が、暗闇の中へと呑み込まれていった。

「プリクラねえ。」

落ち着いたリンを駅へ送るべく、少し前まで二人でよく歩いていた道を歩きながら大よその話を聞いた完司がつぶやいた。

「嘘を付いたのがいけなかったんだよね。」

NEXのビデオも原因の一つかもしれないなんて言えなかった。言ったら、きつと完司も気にしてしまうから。

「そうかなあ。」

「え？」

「リンは嘘を付いたから怒って別れようって言われたと捕らえてる

みたいだけど、俺はそう思わないな。」

完司は直接は新のことを知らないが、話を聞く限りではそんなに心の狭い人間の様には思えなかった。もし、自分が新の立場だったら、と思うと完司の頭の中によぎった考えがあった。

「自分のせいで事故にあった、なんて罪悪感でリンを縛り付けている気がして嫌なんだよ。」

「私、そんなつもりじゃ。」

「リンにそんなつもりがなくても、向こうが思っちゃうんだよ。男なんてカッコつけの生き物だからさ。現に、リン自分のせいで事故にあったって思ってるねえ？」

「うつ・・・。」

「わかりやすいんだよ、お前は。」

リンは凶星をつかれて言葉につまった。亜貴にああ言った手前、やっぱり事故の原因は自分にもあると思わずにはいらなかった。どうしてもあの時あしていれば、という考えは頭の中から消えてくれない。

「好きな人の自由を、自分のせいで奪っているようで嫌なんだよ。」

それは一理あるように思えた。新とリンは似ているところがあって、新も自分が東京に行こうと言わなければ、とか同じようなことを考えているに違いなかった。

「まあそれだけじゃない気もするけどな。」

「えっ？」

「福岡では新とほとんど一緒に居たんだろ？なのに東京で、自分の知らない友達ができて自分の知らない行動をとって、疎外感を感じたんじゃないかな。拗ねてるんだよ。」

（「俺はもう、必要ないんじゃないのか？」）

リンは新の言った言葉を思い出した。福岡では友達と呼べるような人が居なくて、一緒に映画を観に行くのも勉強するのも文化祭と一緒に回るのも、常に新と一緒にだった。新が居ないと、きっと高校生活を楽しいだなんて思えなかったに違いない。でも



「拗ねてるって、子どもじゃあるまいし。」

新に限ってそんなことは思えなかった。頭もよくて成績は常にトップクラス、家のこと以外にはいつも余裕のある新に限って。だけど、完司はサラリと言った。

「子どもだよ。男なんていくつになっても。言っただろ？男はカッコつけだつてさ。」

こんな風に偉そうに言っている完司だって心の中では新への嫉妬でいっぱいだった。好きな女の子の恋愛相談に、心の中は穏やかな訳がない。でも、カッコつけだからそんな思いを雰囲気にも出さないように頑張っているのだ。

「私、どうすればいいんだろ。」

リンがうつむいたまま、不安な声を出した。

「休め。」

完司は即答した。

一人の人間を支えるなんて大の大人にとっても大変なことだ。逃げずに戦っているリンはそれだけですごい。本心でそう思う。だけど「休まないよ、誰だってもたないよ。」

リンの足が止まった。

「休んで、それから考えろよ。大事なのは自分の気持ちだろ？」

リンにつられて完司も立ち止まった。

「完司君。」

「ん？」

向き合ったまま、しばらく何かを考え込んでいたリンが顔を上げて完司の顔を見つめた。

「ありがとう。」

まだ少し涙の浮かんまま、今度は作り笑いじゃない笑顔でリンが言った。

「前もこうやって話聞いてくれたのにちゃんとお礼言っけなかったよね。だからその時の分も。ありがとう。」

照れ隠しからか、完司は公園の時のようにリンの髪の毛を手でく

しゃくしゃにした。

「反則だよ。」

暗くなつた空を見上げながら完司は溜息をついた。身長差のせいもあるだろうが涙の浮かんだ上目遣いで、可愛い笑顔。思わずドキツとさせられた。年下に翻弄されるなんて、俺もまだまだ子どもだと完司は思った。

「え？何？」

「教えない。」

何を意味しているのか理解出来ないリンをその場に置いて、完司は歩き出した。少し遅れてリンも歩き始める。

「何？」

「何で俺がこういうアドバイス出来るかと言うとだな、」  
まだ質問してくるリンから話を逸らす為、完司は別に聞かれてもいないことを語りだす。

「俺も同じだったからだよ。アル中になった親父から逃げ出して、浦田さんに救ってもらったんだ。」

リンの顔は見えないけど、驚いているのがわかる。

「必死で何とかしようともがいたけど、結局親父の元を逃げ出した。」

リンは以前完司が図書館で寝泊りしていたという話を聞いたことを思い出した。おそらくその時の話であろう。

「逃げた自分が情けなくて、でも泣くなんてみつともないか思ってた時に浦田さんに出会ったんだ。自分を守るためには逃げることも時には必要で、涙を抑えずに泣かないといけなくて教えられた。」

完司は公園でリンが泣いた時、昔の自分を思い出していた。ただ違うのは、リンには変なプライドがないこと。泣けと言われれば素直に泣くし、自分が弱いと自覚していた。弱いと思い過ぎている感も否めないが。

「リンは強いよ。自分が思っているよりずっと。」

気が付けば完司の見送りはあともう少しで終わりだった。駅が近付いた証拠に、踏み切りの音が聞こえ、駅前にある店や電灯のおかげで路地も少しずつ明るくなってきている。

「完司君。」

すぐ後ろを歩いていたリンが名前を呼んだ。完司は「はいよ。」と体ごと振り返った。いつの間にかリンは立ち止まっていて、少し距離が開いている。

「私ね、」

リンが決心したように話し始めると同時に、電車が線路を走る音が辺りに響いた。

「えっ？」

電車の走る音が遠くなり聞こえなくなった後、かろうじて聞き取れたリンの言葉に完司が驚愕した。

「本気か？」

完司の問いに、リンは深く頷いた。

「後悔しねえか？」

少し間を置いて、リンがまた深く頷いた。

「そっか。」

リンの目から、また一粒の涙がこぼれた。完司はリンの方に歩み寄り、リンを自分の胸に引き寄せた。リンは抵抗することなく、完司の腕の中に包まれてまた一粒涙をこぼした。

次の電車が近付いて踏み切りの音が聞こえても、その次の電車が通り過ぎても、二人はしばらくそこで抱き合ったままだった。

## 20・最後の集合

「はっ!?!」

終了式の日、リンと佳澄と彩女の三人は体育館で話されている校長先生のありがたい話とやらをマイク越しに、やっぱり屋上で聞いていた。と言つても、ただ小さく校長先生の声が聞こえるだけで、実際には佳澄と彩女がリンの話を聞いているだけであつた。

「マジ?」

「何で?」

二人は驚きの表情を隠せず、一言の質問が続いた。

「私なりに、色々考えたんだ。」

春一番か春二番か春三番か、どの風かわからないが、少し冷たく強い風が屋上に居る三人を直撃した。

「イキナリでごめんね。」

風で髪の毛がボサボサになりながら、リンは二人に謝つた。

「タカスンは、いつも決めてから言うなあ。」

「ごめん。」

「謝んな。理由を言え。」

佳澄と彩女が、リンを理解しようと耳を傾けた。

「二人に出会えて、良かったなあ。」

心で思つたことが、ふいに言葉になる。

「バーカ。」

「今頃気が付いたのかよ。」

強気な発言をしながら、佳澄と彩女の目にうつすらと涙が浮かんでいた。それを見て、リンの視界も少し滲んだ。終了式の時間、ずっと強い風に吹かれ寒いと思ひながらも三人は屋上で時間を過ごした。

三人で過ごした、最後の屋上だつた。

「ねえ、リンちゃんと何があつたの？」

水を入れ替えた花瓶を窓際に置きながら、亜貴が新に尋ねた。リン程ではないが、仕事の合間を縫って新の様子をよく見に来ていた亜貴は最近の新的様子がおかしいことに気が付いていた。

「……………」

新は何も喋らずに、机に置いてあるリンが置き忘れて帰ったプリクラを眺めていた。リンに別れようと言って、もう何日か経っていた。

「新……もう。」

亜貴がまた尋ねようと新的顔を見ると、新は目をつぶって眠っていた。だけど、それは決して狸寝入りじゃないとわかっていた。

最近の新は、口数が減り、リハビリを以前よりも意欲的に行っていた。理学療法士など医療スタッフのから受けるリハビリだけじゃなく、病室でも黙々と自分で出来ることを行い、そして気が付いたら疲れ果てて眠っていた。

「多分リンちゃんが来なくなってからよね。」

新がおかしくなる原因として考えられるのは一つ。リンが絡んでいるに違いない。

「こんにちはー。」

新も眠りについてしまい、もう帰ろうかと思った頃病室のドアが静かに開き、小さな声で挨拶しながらリンがヒョコッと顔を出した。

「リ……！」

亜貴が驚いてリンを呼ぼうとしたが、新が眠っていることを確認して口を閉じた。

「新今眠ってるから、外でいい？」

亜貴は小声でリンに確認した。今喧嘩か何かをして様子のおかしい二人と同じ病室に居るのはさすがの亜貴も気まずい気がした。リンもすぐに状況を把握し、ドアの場所で頷いた。

「亜貴さんにも話があるんですけど、時間大丈夫ですか？」

落ち着いた表情でリンが話しかけてきたことに亜貴は驚いた。新

ともめたりすると、二人揃って様子がおかしくなっていたのに、今回は新だけだ。いつも何かがある度に仲裁の役割を果たしていた亜貴は、リンが東京に来て成長しているのだと気が付いた。

「えっ？」

「ごめんなさい、ずっと新に会いに来るって約束したのに。」

亜貴はリンが言った内容にショックを隠せなかった。喧嘩をしても、いつも何だかんだで仲直りして元通りに、いや、喧嘩をする度に二人の絆は強いものになっているように感じており、それはこれから続くものだと思っていた。それなのに

「いつから？」

「え？」

「いつから決めてたの？」

亜貴が悲しそうな顔をしている。きっと思ってもいなかったことなのだろう。

「新が目覚めます、ちょっと前からです。」

「どうして？」

亜貴が少し睨む様な、理解できないという気持ちを前面に出してきた。

「新が目覚まさなかったら、新は何も知らないままで、もしかしたらそのまま目を覚まさなくて・・・それでも？それでも決めてたの？」

亜貴は新のことを本当に大事に思っている。それを考えると当然の考えだった。

「亜貴さん。新が目覚ましていなくても、私は同じような道を歩んでたんじゃないかと思うんです。時期は今じゃなかったかもしれない。だけど、いずれはこうなったと思うんです。勝手に本当にごめんなさい。」

亜貴の目に涙が浮かんでいた。新とリンを応援していただけに、リンの固い決意は裏切りのように感じたかもしれない。

「・・・二人にしかわからないことが、あるものね。」

泣くのをこらえるような声で、亜貴が震えるように言った。

「亜貴さん。」

「ごめん、賛成はできない。」

リンに向けてピシヤリと言った。リンはある程度覚悟していたよう  
うで、一度は困惑の表情をしたものの、すぐに落ち着いた雰囲気を取  
り戻した。

沈黙した時間が二人の間で少し流れた。

「だけど、覚えておいて。」

亜貴もようやくいつもの落ち着きを取り戻し、正面からリンを見  
据えた。

「リンちゃんのこと、大好きだよ。」

「亜貴さん。」

亜貴のように、リンの視界も少し滲んだ。最近涙腺が緩んでいる  
のか、泣いてばかりだ。

「私もです。私も、亜貴さんのこと大好きです。」

自分の姉とは違う雰囲気、憧れの人。それは、きっとこれから  
も変わらないだろう。

「これが最後になつたりしないよね？」

亜貴が寂しそうに言った。

「はい。」

リンも心なしに寂しさを感じた。ずっと新との傍で一番応援して  
くれた人。その感謝は言葉に出来ないくらい、溢れている。

「頑張つて。」

そう言つて亜貴は自分の右手をリンの方に差し出した。

賛成は出来ないが、固く決意をしているのならそれを応援しよう  
と亜貴は決めた。大事な弟のことを思うとこれでいいのはわから  
ないけど、リンだって妹のような大事な存在。彼女の意思も、ちゃ  
んと聞き入れよう。

「亜貴さんも、仕事とか頑張つて下さい。」

リンも自分の手を差し出して、亜貴の右手を握った。

「新のこと、お願いします。」

まだ寂しさの残るままリンは言った。亜貴は少し悲しそうな笑顔でリンを見つめて静かに頷いた。



## 21・戻るよ

病室のドアを開けると、新は窓の外を眺めていた。

「新。」

リンがその内来ることを予想していたのか、新は特に驚くことはなかった。

「もう来るな、って言っただろ。」

リンの目を見ずに新が言った。

「その割には追い出そうとしないね。」

「別れよう、って言っただろ。」

「わかりましたって言った記憶ないけど。」

新の視線がリンへと移った。

「帰れ、って言ったら？」

「帰らない。すぐにはね。」

そう言ってリンは棚に置いてあるプリクラを手に取り、鞆から取り出したはさみでジョキンと半分に切り始めた。

「東京でできた友達。一番右が佳澄で一番左が彩女。」

プリクラの半分を自分の手に持ち、半分を新の手元に置いた。

「彩女は手先が器用でね、ヘアメイクとか美容師の道に進む予定なの。佳澄はまだ未定。」

ベッドの横に置いてある椅子に座り、リンははさみを鞆の中にしまうと共に一枚のCDを取り出した。

「それで、これが前新が見てたビデオのバンドのCD。ボーカルの人が図書館で働いてて知り合ったの。」

写真も何もない、シンプルなCDには新から別れを告げられた日に励ましの意味で完司がくれたNEXの曲が入っている。完司の許可をもらい佳澄と彩女にはすでにコピーして渡していた。

「みんな、すごくいい人。今の私にはかけがえのない存在なの。」

何も迷うことなく、リンは真っ直ぐと新を見つめて言った。新も、

目を逸らすことなくリンを見つめている。

「でも、新も必要。」

ゆっくりと一呼吸した後、リンは続けてはつきりと言った。

「この先、長い人生の中で私にかけがえのない人が増えても、新は必要。新は特別なの。」

相変わらず強い風が病室の窓を叩きつけ、ガタガタという音が静かになった病室の中に響いた。

「俺もだよ。」

しばらく黙っていた新が、ようやく口を開いた。

「リンは特別な存在。」

「新。」

「だから別れようと思ったんだ。その気持ちは、嘘じゃなかった。新の表情が曇った。あの日のことを思い出しているのだろう。」

「リンは俺みたいに寝たきりじゃなくて自由だ。これから進路のこととかで大変な時期になるのに、俺の見舞いなんかで縛り付けてしまおうとリンの将来を奪ってしまう気がしたんだ。」

完司の言ったとおりだった。リンのことを思うと、別れるのが一番いいと思ったのだろう。

「いいよ。」

「え？」

「奪っていいよ。その代わり、ちゃんと責任取ってよね。」

リンの強気な発言に、新は声を失った。

「前に言ったでしょ。新の腕が戻らなかつたら私が新の腕になる。」

足が戻らなかつたら足になる、って。あの時は確かに感情で突っ走ったけど、今は本気だから。」

「リン、でも。」

「私ね、リハビリの道に進もうと思うの。社会に出る頃には新はもう一人で生活できるようになって、私はもう必要じゃないかもしれない。そしたら、新と同じように苦しむ人達の力になれたらと思う。」

リンは話していると気が高ぶって涙が浮かんできた。今日はもう三回も視界が滲んでいる。でも、それを恥ずかしいことだとは思わない。生きていく上で、泣くことは必要なことだから。

「縛り付けているなんて思わないで。私が来たくて、来てたんだよ。」

「俺は、リンにそこまで想われる価値のある人間じゃないよ。」

新の目にも、涙が浮かんでいる。新はそれを隠すかのように、下にうつむいた。

「別れようとか言いながら、リンを必要としている。そんな勝手な男なんだよ。事故の直前だって、そんな優柔不断さがあつたから事故つたんだ。」

「別れようと、してたの？」

リンは体の血の気が一気に引いたのがわかった。事故の後だったからリンのことを気遣ってたとわかるが、事故の前に別れようとしていたのなら話が違う。気持ち完璧に離れていることになるではないか。

「違う。東京に戻ろうと思ったんだ。」

とりあえず別れる意思がなかったことにリンは一安心する。しかし、すぐに気を引き締めた。

「東京に？」

「家のことから逃げないで、東京に戻って来ようと思ったんだ。家のことを乗り越えないと、俺は今の地点のまま強くなれないって思ったから。だけど、リンと離れたくないか思ったらあの時言えなくて。弱くて情けない男なんだよ、俺は。」

新がリンのプリクラを握りしめた。リンが見舞いに来ていた時よりも握力が強くなっているように感じる。

「あの時新が東京に来るなんて言ったら、多分笑って送れなかったな。」

そのリンの台詞に、新が顔を上げた。

「あの時は新が全てだったから。新が自分の傍から居なくなるなん

て、絶対に耐えられなかったと思う。私も、弱くて情けない女だよ。

「リンの目から、静かに涙が溢れて頬をつたった。」

「私達、一緒に居たらこれ以上成長できないね。」

二人の壁を作ったままだと、きつと二人共大人になれない。それは福岡に居た頃から薄々気付いていた。だけど、口にする则二人の關係が終わってしまいそうでどっちからもう言うことができなかった。まだまだお互いに子どもなのだ。

「そう、思う。」

新が静かに、諦めたように言った。きつとこれで終わりだと覺悟したのだろう。

「でも」

「?・・・!」

リンは椅子から立ち上がり、ベッドの上から動けない新にキスをした。触れるか触れないくらいの、短くて優しいキスを。

「別れてやんないもんね。」

「リン。」

「女の子を待たせた罪は、重いんだから。」

新は事故の時の事を思いだした。体が飛んで意識を失いそうになった時に絶対に死なない、リンは自分の手で幸せにするんだと思ったことを。

新の目から涙がこぼれた。今まで泣きそうになっても、絶対に見せなかった姿をリンの前でとうとうさらけだした。

「リン。」

新がベッドの上を動き出した。元々ベッドのリクライニング機能で体は起きた状態だったが、それに頼らず自分の力で体を支え、そしてベッドの端に辿り着くと両足を床の上に放り出した。

「新？」

「あの日から、リンのことを忘れようと無我夢中でリハビリしてた。体が疲れて、ベッドに横になっただけで眠ってしまうくらいに。」

すでに疲れを感じ始めているが、かろうじて残っている力を振りしぼって新は自力で立ち上がった。

「リン、好きだ。お前を失いたくない。」

フラフラしながらも、新は真っ直ぐにリンを見つめて自分の気持ちを伝えた。

「新・・・あ！」

新は言い終えると、その場に膝からゆっくりと崩れ落ちた。そのまま前に倒れようとしたところを、リンが慌てて駆け寄り、体ごと抱きとめた。

二人共膝を付いたまま、抱き合った体勢となった。久しぶりに新の体温を感じてリンの目からは次から次に涙がこぼれてくる。

「新。」

新の息が上がっているのが熱と肩の上下具合で伝わってくる。

「私、福岡に戻るよ。新の居ないところで、一人で頑張ってみる。」

「そうか。」

新はすんなりとリンの言うことを聞き入れた。東京に戻ろうとしていた決意と同じだと、すぐに理解できたからだ。

「遠距離だな。」

「今の私達なら、大丈夫なんじゃない？」

そんな気がした。今離れ離れになっても、きつとお互いへの気持ちが薄らぐことなくやっていけると思った。

それがたとえまだ幼い証拠、と言われても。

リンは少し自分の体を離し、新と顔を向き合わせた。そしてどちらからともなくフツと微笑み、キスをした。

「リン約束して。」

唇が離れるとすぐに新が口を開いた。

「何？」

「嘘はもつつくな。」

リンは新の目を見て深く頷き、もう一度抱きしめた。しばらく会えなくなるお互いの体温を自分の体の中に刻むかのように、長い時

間抱きしめ合っていた。

病室の中はいつの間にか夕日色に染まり、二人の二つになった長い影を作っていた。

## 22・偶然の結果

「ごめんね、急に呼び出して。」

終了式の次の日、リンは完司を呼び出した。完司は浦田さんのはからいで少し長めに昼休みを貰えた為、以前に肉まんを食べた公園で待ち合わせをした。

「いや、気にすんな。新とは話できたか？」

「うん。昨日ちゃんと話をしてきた。」

「そっか。」

完司はリンの表情を見て、お互い納得がいくように話せたのだと理解できた。それと同時に、完司の入り込む隙間はもう全然ないのだと感じた。

「いつ福岡に帰るんだ？」

「今日。最終の便で帰るよ。NEXのみんなにも会いたかったけど、それはちよつと無理そうかな。」

「そっか。」

「でも、完司君にはどうしても直接お礼言いたくて。背中を押してくれてありがとう。」

リンが新から別れようと言われた日、駅の近くで完司がリンを抱き寄せて「頑張れ。」と言って胸を貸した日のことを二人共思い出した。

「話を聞いてくれてありがとう。」

「どういたしまして。」

「支えてくれてありがとう。」

「もういいって。何回礼を言っただよ。」

完司が笑いながらリンのお礼を止めた。

「不思議だよな。事故に遭った直後は絶望の中に居たのに、ひょんなことからこの場所に居るなんてさ。」

リンが体の向きを変えて、公園を見渡した。

「事故に遭わなかったら、佳澄と彩女に無理やり合コンに連れて行かれなかったら、コウと出会わなかったら、図書館を知らなかったら、この場所にこうやって完司君と居ることがなかったんだよね。」

「リン。」

「色んな偶然が重なって今の自分が居るんだよね。」

昨日と違って風のない公園に、暖かい日差しが降り注いでいる。

「リン。」

「ん？」

完司の呼ぶ声に反応つつもリンの視線は公園に向いている。

「リンが俺を知るのは、必然だったよ。」

「え？」

「俺、歌手だから。」

完司のその言葉には、絶対に有名になるという意味が込められていた。

「そうだね。」

リンが馬鹿にすることなく、優しく微笑んだ。

「福岡に帰っても、応援してるから。」

「遠いな。」

「そうだね。簡単には来れないね。」

「辛くなったら、いつでも連絡しろよ？」

「うん。あ、でも完司君に彼女ができたらちょっとしづらいなあ。」

以前に完司に彼女がいないと聞いていたので、出た言葉だった。

「リン。」

「ん？」

今の完司はリンのことしか見ていないのに。そのリンから『彼女ができたなら』なんて自分は眼中に全く入っていないと感じると切なくなつて、完司は後ろからリンを抱きしめた。

「完司・・・君？」

以前に駅の近くで胸を貸してもらった時とは明らかに違う感覚にリンは戸惑った。



「リン。頑張れよ、本当に。」

抱きしめる腕の強さで、リンは完司の気持ちをようやく理解した。  
(完司君、私のこと……………)  
……………)

いや、本当はとっくに気付いていたかもしれない。何かある度に助けてくれた完司の暖かさには、友達以上の気持ちが滲み出ていた。きっとそれに気付かないフリをしていたのだ。完司の気持ちには答えられないから。

「完司君。」

「風邪ひくなよ。」

「かん」

「風呂入れよ。」

「か」

「歯、磨けよ。」

完司は昔の番組を紹介するテレビで聞いたことのあるようなフレーズを、リンの言葉を遮って並べて言った。抱きしめる腕の強さから、完司の気持ちがヒシヒシと伝わってくる。

「これからも歌うから。」

「うん。」

「絶対に有名になって、リンがどこに居ても歌が届くように頑張るから。」

「うん。」

完司の声が少し涙混じりになってきて、それにつられてリンも泣きそうになる。本当に最近泣き虫だ。

「リンも、頑張れよ。」

「うん。完司君も。」

完司が更に強くリンを抱きしめた。

「リン。俺が腕を離したら、俺の顔を見ずに行つて。」

「えっ？」

「絶対、見るな。」

「わ、わかった。」

「離すぞ。」

そう言って、完司の腕がリンから離れた。リンは足が地面とくっついていくかのように、その場から動くことができない。

「行けよ。」

完司が少し、ぶつきらばうに言った。涙が流れるのを、必死で押さえている声だ。

「行け、早く。」

リンも泣くのを必死に押さえて、やっと歩き始めた。完司の言う通り、振り返らずにただ前へと。

一歩踏み出す度に、完司と過ごした時間がよみがえってくる。

図書館の入り口で初めて会った時。

駅まで送ってくれた日々。

お笑いライブに行った日。

NEXのライブをみた日。

泣かせてくれた時。

励ましてくれた日々。

その他のことも、全部。

何回お礼を言っても足りない感謝の気持ち、こらえきれなかった涙と共に溢れた。

「完司君！」

リンは振り向くことなく完司の名前を呼んだ。ちゃんと聞こえるように、大きな声で。

「ありがとう。本当に、ありがとう！」

肩を震わせて一生懸命お礼を言ってくるリンの背中を見ると、完司は更に泣きそうになった。

「だから何回言うんだよ。」

完司が少し笑いながら言うと、リンもフフッと軽く笑った。

「俺の方こそありがとう。リンと出会えて、良かった。」

「私も。」

「早く、行け。」

「うん。」

もう一度完司に促され、リンはまた歩き出した。振り返ることなく、もう立ち止まることなくただ前をしっかりと見据えて。

完司は最後となるそのリンの背中を見えなくなるまでじっと見ていた。公園からリンが居なくなっただ後も、しばらくリンの歩いて行った方から視線を動かすことが出来なかった。

「だから俺は、中坊かっての。」

ようやく動いた完司はまたいつの日かのように自分にツッコんで空を見上げた。青く澄んだ空に、白い雲が少し浮かんでいた。

## 最終話 キセキ

「もうそろそろ、行かなきゃ。」

空港のアナウンスを聞き終えた後、そう言ってリンは椅子から立ち上がった。

「もうか。」

「早いな。」

空港でリンと一緒に晩御飯を食べた佳澄と彩女も同時に椅子から立ち上がった。

「休みの日とか、来いよ。」

「息抜きも大事だからな。」

「うん。二人も、福岡の方に遊びに来てね。」

荷物はほとんど宅急便で送ったため、最低限の少ない荷物しか持っていないリンはちよつとそこら辺に出掛ける様にしか見えない。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

最後に何を言えればいいのかわからず、三人が無言になる。

「寂しい。」

その沈黙を最初に破った彩女が泣き始めた。

「泣かないって約束したじゃん、もう。」

彩女の涙を見て佳澄も泣き始めた。

「タカスン、私ら一生のダチだからな。」

「うん。」

そんな二人の涙を見てリンの目にも涙が浮かんでくる。東京で、一生分の涙を流した気がする。

「じゃあ、またね。」

リンは二人を見てゆっくりと笑顔で言った。その表情からは二人と出会った時のような絶望感は全く感じられない。

「うん、また。」

「またねえつ。」

冷静な佳澄と相変わらず激しく泣いている彩女に最後の挨拶をした後、リンは背中を向けて荷物検査室の方へとゆっくり向かい始めた。佳澄と彩女はその場から動かず、どんどん小さくなっていくリンの背中をずっと眺めている。

「急げ！」

「こつちか？」

「居た！」

「おい、リン！」

リンが荷物検査の順番を待つ列に辿り着いた頃、聞き覚えのある声が慌ただしく聞こえてきた。その声に反応して振り返ると、見覚えのある人達が視界に入った。

「みんな・・・！」

「バイト早めに終わらせてもらっただんだ！」

「大変な時に抜けてきたから睨まれちゃったよ。」

「雷、ユキ。」

「何の挨拶も無しに帰るなんて、冷たいヤツだな。」

「コウ。」

「俺のメールの返事はいつも遅いのに、今日リンが福岡に帰るって言ったら速攻でみんな集まったんだぜ。」

「完司君。」

「完司とは昼頃ちゃんと挨拶しただけに、何だか少し照れくさい。」

「みんな、ありがとう。」

オレンジ色に空色に桜色に茶色の頭の四人組は空港内でどう考えても目立っている。佳澄と彩女もそんな四人組に気づき、近付いてきた。

「目立つー。」

「パネエ！」

リンの大事な六人が横に並んだ。

「またうどん食いに来いよ。」

「変な人に付いていくなよ。」

「髪の相談はまかせろ。」

「頑張れよ。」

「うわあ、完司普通。」

雷 ユキ コウ 完司の順で一通りメッセージを貰うと、雷が笑いながら完司を指摘した。皆もつられて笑い出す。

「いいじゃん、別に。」

完司がちよつと拗ね気味に言う。

「みんな、またね！」

リンは大事な六人を誰一人見逃すことなく本当に最後の眺めて挨拶をし、荷物検査室の中へと消えていった。昼頃完司と別れた時同様、一度も振り返ることなく。

「よし、今から完司の失恋パーティーな！」

「はっ!？」

リンの姿がすっかり見えなくなると、コウが最初に口を開いた。それに続いて完司は思ってもいない言葉に素<sup>す</sup>頓<sup>とん</sup>狂<sup>きやう</sup>な声を挙げた

「ばればれですよ。」

佳澄の言葉に彩女もうんうん、と頷く。

「まず晩御飯はうどんな！」

雷がちやつかりバイト先の宣伝をする。

「あー、もう!！」

完司が真っ赤な顔をして吠えた。

「ほら、行くぞ。」

そんな完司を無視するかのようにな、ユキが先導してスタスタと歩き出した。

「主役は俺だろっ！」

完全に開き直った完司がユキを追い越し先頭に立った。その完司を雷が追い越すと、完司がまた先頭に立とうと走り出し雷と完司の先頭争いが始まった。

「何やってんだ。」

「まだ子どもだな。」

「でもちよつと可愛いかも。」

コウとユキが大人な発言をすると、佳澄がポツリと言った。

「えっ？どっち？」

佳澄の言葉に彩女が食いつく。

「知らない！」

「え？待て！」

佳澄は彩女の間をはぐらかすと少し照れながら完司達の方へと走り出し、彩女もその後を追い始めた。

「二人まで。」

「若いからな、女子高生。」

ユキの親父くさい発言に、コウとユキの二人は顔を合わせてクスリと笑うと皆の後を追いかけて走り始めた。

空港の外に出てからも走りを止める者はおらず、すっかり暗くなつた夜空に皆の足音と笑い声がいつまでも響いていた。

『リンちゃん、もう飛行機かしらね。』

『そうだな。』

ナースに車椅子で携帯電話の使用可能場所に連れてきたもらった新が亜貴に簡単に返事をした。携帯電話は顎と肩の間に挟んで、ころうじて一人の力で話せている。

『寂しくない？』

「そりや、少しはね。でも大丈夫だよ。」

確かな気持ちで、俺達の間にはあるから。

大きな窓から見える夜の街を見渡すと、遠くの空に飛んでいる飛行機を発見した。リンが乗っているのは、あの飛行機だろうか。

「姉貴にも、まだまだ迷惑かけるよ。」

『ふふ、覚悟してるわ。』

もつとりハビリを頑張つて、飛行機に乗ってリンに会いに行こう。

それが今の新の目標である。

亜貴との電話を終え飛行機の進路をしばらく眺めた後、新は再びナースに車椅子を押してもらい自分の病室へと戻っていった。

戦いはまだ始まったばかりだ。そう思いながら。

希望していた窓際の席をゲットできたリンは、座席から真つ暗な夜の雲の上をじっと眺めていた。新と東京に来た時、明るい雲の上の風景と一緒に眺めたことを必然的に思い出す。

「明日から仕事かあー。」

「あつという間に三日過ぎたな。」

後ろの席から旅の終わりを嘆く恋人と思われる男女二人の会話がリンの耳に入ってきた。あの日事故に遭わなければ、リンも新とこのような会話をしながら福岡へと帰っていた筈だった。

（本当、人生何があるかわからないよなあ。）

後ろ二人の三日間を振り返る楽しそうな話を聞きながらリンはそう思った。

でも、事故に遭ったことで学べたことがたくさんある。だから決して無駄なことではなかった。

（福岡に着くまで、一眠りするかな。）

昨日夜遅くまで帰りの準備をしていた為、落ち着いてくると睡魔が一気に襲ってきた。それと格闘することもなく、リンは静かに目を閉じた。

ねえ新。

新が以前のように後遺症のない体に戻ることは奇跡なのかな。

でも、私その奇跡を信じてみようと思う。

神様は信じないけど、何か一つくらい信じるものがあってもいいよね。



あの雪の上で言われた、新の言葉のように。

**最終話 キセキ（後書き）**

ご愛読ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2696d/>

---

雪の上の約束

2010年10月8日15時49分発行